神道の正意を發揮せんとす、篤胤は秋田の人、少にして漢學及び醫術を究め、江戸に出でゝ山鹿流の兵學家平田篤穩に養はれ、享和元年偶ま本居宣長の書を讀んで大に感奮する所あり、名を其門下に列して提撕を受け爾來讀書と著述とに一身を委ね、神道發揮を以て事とす、彼れは儒佛二教のさま〴〵に生前死後のことをいふを非とし、

百千の聖人額を蹙めて考へたりとも、知ること能はじをや、さてこそ孔子は不知生焉知死とは云へりけれ、然れば人の生るゝ始のこと、死て後の理なぞを推慮にいふにいとも益なきことなれば、只だ古傳說を守りて、人の生るゝ事は天津神の奇妙なる產靈の御靈によりて、父母の生なして、死ぬれば其靈、永く幽界に歸き居るを、人之を祭れば來りうくること、在の儘に心得居りて强ちに其上を穿鑿ていもあるべき物なり、そは此上の所は人の智もては、たしかに測り難く、知り難きことなればなり。

といひ、其著「靈の眞柱」にては從來神道家普通の思想たりし死後の靈魂は夜見の國(黃泉)に赴くべしとせるを駁し「さてかく人の死て其の魂の黃泉に歸るてふ說は外つ國より混れ渡りの傳へにて古には跡も傳へもなきことなり」といひ、

なほ云はゞ人魂のすべては夜見に歸るまじき理は神代の事實によりて知るのみならず、人の生れ出る所由、又死にて後の事實を見ても曉るべきは、先づ人の生れ出ることは父母の賜物なれども、其の成出る元因は、神の產靈の奇しく妙なる御靈によりて、風と火と水と土、四種の物をむすび、成したまひ、それに心魂を幸賦りて生れしめたまふことなるを、死にては水と土とは骸となりて、顯に存在るを見れば、神魂は風と火とに供ひて放去ることと見えたり(之れにつけて案ふにあやしひと云々)こは風と火とは天に屬き、土と水とは地に屬べき理のあるによりてなるべし、しかあれば、これも人の神魂のなべては夜見に歸るまじき一つの理なり、さるは神魂はもと、產靈神の賦たまへるなればなり、されども、おしなべて然かあるべき確かなる事實も古傳も未

だ見あたらず、さて人死にて神魂と亡骸と二つに別れたる上にては、骸は汚穢もの、限りとなり、さては夜見の國の物に屬く理なれば、その骸に觸れたる火に汚れの出來るなり、また神魂は骸と分りては、なほ清潔から謂のありと見えて火の汚穢をいみじく忌み、その祭祠をするにも、汚のありては、その享を受ざるなり、現に見たる事實に試考へたるも淨と不淨とその差別の灼然を、かく汚穢を忌み惡む魂の其穢の本つ國亦汚穢の行き留る處なる夜見に歸く由のいかであらめや云々、

といひて黄泉説の理由なきを論じ、別に靈魂の歸趣を説きて、

さもあれば此の國土の人の死て、その魂の行方は何處ぞといふに、常磐にこの國土に居ること古傳の趣きと今の現の事實とを考へわたして明に知らるれども、萬葉集の歌にも百足らず八十の隈路に手向せば、すぎにし人にけだし相むかも」と咏る如く、此顯明の世に居る人の、たやすくは、さし定め云ひ難きことになむ、そはいかにもいふに、遠つ神代に天神祖命の御定めまし、大詔命のまに〳〵その八十隈手に隱れ坐

ます大國主命の治する冥府に歸命まつればなり、抑もその冥府といふは此顯國をおきし別に一處あるにもあらず、直に此の顯國の內いづこにもあなれども、幽冥にして現世とは隔り見えず、かれ唐土人も、出冥また冥府とはいへるなり、さて其の冥府よりは人のしわざのよく見ゆるを、顯世よりは其の幽冥を見ること能はず、そを譬へば、燈火の籠を白きと黑きとの紙もて、中間よりはり分ち、そを一間におきたらむが如く、其闇方よりは明に能く見ゆれど、明き方よりは闇き方の見えぬをもて、此差別を曉り、はた畏冥の畏きことをも曉りおかし。

といひ、更に、其靈の所在を以て社祠を建て、祭れるものは其處に鎭坐し、然らざるは其墓邊に鎭り居るとし、

上代より墓所は、その骸を隱くし、はた其魂を鎭めむために、かまふるもの故、吾も人も死ぬれば其魂は骸を離れつゝも、其上に鎭坐るなり、さてこそ諸夷も大倭も上古にも今の世にも、人の靈魂の墓上にて靈異を現したること數へも盡されず。

烏傳神道と脫

と說き、こゝに神道の死生觀を大成す。

幕末に至りて民間に諸種の神道を發す、加茂規清は烏傳神道を唱へ、其根底を禪と陽明とに採り、靜坐の必要をいひ「人間に五常の道備はるも皆な其元は天地の道の人間に含る所にして決して私の此體に妙あるにあらず、凡て天地の神の爲す所の道なり、斯の如き道を我が國に於て神道と號する所以は皆既に天照太神の道なるが故なり」といひ信者數千人、幕府の怪む所となりて八丈島に流され、孤島靜かに心を養ひて信仰を改めず、又井上正鐵は誠心誠意を以て神の心とし「トホカミエミタメ」なる祝祓を唱へて禊敎を首唱し、これ亦幕府の嫌疑を受けて三宅島に流されて尙布敎を怠らず、共に民間信仰の一勢力なりしといへども、死生の觀察に於ては從來の神道と大差あるを見ず。

黑住宗忠

備前の人黑住宗忠、夙に垂加神道を究め、神明の心を測り、神明の行を想ふに其目的人間に幸福を與へんとするに外ならずと、惡を避け、善を修し、身心を淸め精神を凝めて、文化十一年十一月十三日太陽を拜して天地生々の靈機を自得し、天照太神と一心に成りて少しも亂れざる時は死のあるべき理なしとし、

天照す神の宮居に住む人は
限り知られぬ命なるらん

といひ、

天道は生々にて、天地の道には死と申すことは更に御坐なきものに御坐候。

といふ、其他、藤井文次郎によりて唱へられたる金光敎、中山ミキによりて說かれたる天理敎、島村ミツによりて傳へられたる蓮門敎の類、各各其所說を異にすといへども、其死生に就ては多く普通の說と異らず。

天理敎の死生觀

こゝには、天理敎徒が輓近に至りて編纂したる天理敎典の說く所を擧げて、他を略せんとす、

生死は寢寐の如し寢たるは卽ち生にして寢たるは死に異ならず、然れば神魂の肉體に來り寓するを生とし去りて幽に入りたるを死とす、是を以て生死は

肉體に係る現狀に名くる所にして、其去來する神魂に在りては更に生滅あるも無きを知るべし、故に上に生死二なしとは既れたるなり、また賢且善にして貧なるものあり、富且惡にして富なるものあり、順境に遊ひ逆境に遇ふも亦之れに同じ、されど、こは現世の生より死に至るの間のみを看たるものにして、悠久なる不滅の靈魂は假令現世に在ては貧且逆なりと雖も、其善德あるものは、幽界に歸して至妙の樂境に詣り更に富貴幸福なる生命を天地の間に享く、富且順なりと雖も惡德を逞しくするものは、幽界に歸して辛苦を免るゝこと能はずして、再び貧賤困難なる命を現世に寓す、如斯にして善德善果を生じ惡德惡果を生じ旋轉極りなし。

と、巧みに佛教三世因果の說と神魂不滅の說とを融合したりと雖も、これ神道正統のものにあらず。

(六)　俗間文學並に遊俠の死生觀

文敎の復興は啻に硬文學の勃興のみならず、軟文學も亦大に勃興し文祿時代に至りては西に西鶴、巢林の妖艶あり、東に芭蕉正風の閑寂あり、

春風滿雨千紫萬紅を漲らして兩都の特色を發揮し以て一代の嗜好を示しぬ。今此三人者を撰びて其感想を窺はん。

近松が死生に對する感想は之を幾十編の心中淨瑠璃に窺ふべし、蓋し情死の目は外邦に存せずして獨り我邦にある所其因由するは蓋し佛敎が來世の觀念に基きしは明かなる事實にして、巢林の戲曲に顯はれば「戀なさけ此を瀨にせん蜆川、せかれて過へぬ身」を殺して九品蓮臺の淨國に一蓮托生の希望をかけたりしなり、戀と義理との柵にせかれて生き得ざる世を逃るゝと共に、何等の障礙なき未來世に於て晴れて夫婦たらんことを翹望したりき、彼等は死ぬる臨終の刹那に於て未來の約束を固め、「離るまい、はやるまい」との一念に由り、安んじて死の刃を其咽喉に擬したりき、或は未來永々の夫婦たることを死すべき人の口より聽きて以て今世、情無かりし其夫を許したりき、近松が作なりと傳ふる小曲「鳥部山」は歌ふらく、

「獨り來て二人連れ立つ極樂の、淸水寺の鐘の聲、はや初夜もすぎ四つも

つげ、九つ心の闇路をば照らすやいなや稻妻の、光りし跡の暗さこそ、われら二人が身の上よ、今はなまなかながらへだてしたら憂身にあいそもこそ、盡きた浮世やいざ鳥邊野の、露と消えんと最後の用意、女はだには白無垢や……」。

巢林子が世話物の佳作として人口に膾炙する「天の網島」、「冥途の飛脚」、心中宵庚申」は何れも同時代にありし事實を扮本として一篇の結構を作せしものなれども近松が戲曲によりて其時代に於ける情死を盛んならしめしと云へる事實は延ゐて同時の人心の傾向が、歡樂無盡の境にありながら及に伏して死する底の情緒を有せしものたるを證するに非ずや、巢林子の筆は人を魅することは既にあり、然れども一代の風潮が巢林子をして情死戲曲を作せしめしは蓋し理の然る所、强ちに近松が戲曲が心中を皷吹奬勵したるが如きには非ざるべし。蓋し同代の人情が、紛糾せる人生の葛藤は死を以て解決するを得と思ひし反響が、近松に由りて描寫せられたりしのみ。

世の中に絶えて心中なかりせば、二世の頼みも無からまし、誰かしそめし此契、音に聞きしは生玉の、それが初めのたい市之丞、つれて男も名の高き、大和の國や三笠山、笠屋三勝舞の袖、褄と褄とをひきよせて、結ぶ無常の薄煙、千日寺のはかなしや、別れし跡の寢姿は、東寺の鐘に目をまさし、かゝよ〳〵の乳呑子の、歎きをすてし修羅の道、魂は冥土に到れども、魄となりたる今の世の、おつうは母の形見ぞや此曾根崎に埋もれぬ、大阪三十三番に、名を殘したる普陀落や、大慈大悲の誓ひにてつひには兜率天滿屋の、お初も佛仲間かや、道具屋おかめ與兵衛とは、思へば近き町つゞき、世は何事も難波橋、よしとあしとの堺筋、中に立つたる濺が身は不便と思へ備後町、それのみならず呉服屋の、手代半兵衛は彼の池田屋の小菊にたんと金入なれば、心どんすなものでもないに、身のしゆすごしに氣はちり緬の、店の帳面皆ぬめりんす、らしやもない事いはしやりんずの、はや人魂もとびざやぬいて、共に及の諸はぶたへの、同じ枕にふしつむぎ、重ね井筒の

戀の水、むすび汲む手は多けれど、色は樣々紺屋染、胸はもえぎに紅ひはだ、さやけき色は是ぞこの、とくさに染めてさしもげに、心中みがくゆかりかや、花紫に薄淺黄、桔梗花色地白形、紺屋ののりの道廣く、到りさきだつ此人々を今身の上の知識ぞと(心中及は氷の剱日)

一文是れ心中の賦、死に行く身の足痕に先き立ちし人が情死に赴きし道を踏み行く平野屋の小かんは、慈魂斷腸の感に堪えずして同時代の不過なりし戀愛を歎くと共に自ら其の末路を悲しまざるを得ざりき。

巢林子が浮華奔放を以て生命とせる元祿時代にありて一面世間を謳歌しつゝ尙ほ他面生死榮辱を達觀して浮世に超然たりしは全く其人格の大なりしに由らざるべからず。彼自ら其像に贊して曰く、

近松門左衞門性者杉森字者信盛平安堂巢林子之像

代々甲冑の家に生れながら武林を離れ、三槐九卿につかえ咫尺し奉りて寸爵なく、市井に漂ひ商賈しらず、隱に似て隱にあらず、賢に似て賢ならず、ものりしに似て何もしらず、世のまがひもの、から大和の

敎ある道々、技能雜藝滑稽の類までしらぬ事なげに口にまかせ筆にはしらせ一生を囀りちらし、今はの際にいふべくおもふべき眞の一大事一言半句もなき倒惑、心に心の耻をおほひて、七十あまりの光陰、おもへば我世經畢、

もし辭世はと問ふ人あらば

それ辭世さるほどに扨もそのゝち

殘る櫻の花しにほはゞ

享保九年中冬上旬

入寂名阿耨院穆矣日一具足居士

不俟終焉期豫自記春秋七十二歳　印

のこれとはおもふもおろかうつみ火の

けぬまあだなるくち木がきして

近松の溫藉に對して妖艶纖麗の美を恣にせしものは西鶴なり。西鶴は浪華檀林の稗將、一たび筆を好色本に着くるに當りてや絢爛たる元祿の

美は輕儁なる彼が筆に由りて描寫され盡しぬ。一代女、五人女は一代の
婬靡なる風を描きたれども其內自ら死生に關する風潮あると猶巢林子の
それに似たり、五人女は多く材を近松が採りしものを備ひ來り悲慘なる
情人の最後を歎きたるものにして、一貫せる沈痛の情緒あるを知るべし、
一代女及び一代男は放縱不羈なる男女が一代のわざくれを寫し當時の風
俗を忌憚なく暴露せしかど尙一代女の卷末には人間が死に對する情緒を
述べて面白き反覆の妙を爲すと共に、僞り難き人間中心の哀情を訴ふ、

「一代女」

曰く、

「身は一つを、世に長生の恥なれや淺ましやと、胸に火の車をとゞろかし泪は湯玉散るごとく忽ちに夢中の心になりて(中略)足早に門外に出、此時身の一大事を覺へて、殊なるかな名は留つて形なし、骨は灰となる草澤邊、鳴瀧の麓に來りて菩提の山に入る道のほだしもなければ煩腦の海をわたる舷綱をとき捨て彼岸に願ひ、是なる池に入水せんと一筋にかけ出るを昔の好ある人引留めてかく又笹葺をしつらひ死は時節にまかせ今迄の虛僞本心にかへつて佛の道に入とすゝめ殊勝に思ひ込、外なく念佛三昧に明暮を板戸を、稀なる人音づれにひかせれて酒は氣を亂すの一つなり、短き世とは覺へて長物語のよしなや、よし〳〵是も懺悔に身の曇晴て、心の月の淸く春の夜の慰み人我は一代女なれば何をか隱して益なしと、胸の蓮華ひらけてしぼむまでの身の事、たとへ流れを立たればとて心は濁りぬべきや」。(「一代女」皆思謂五百羅漢)

一生の放埒を盡せし一代女も萬木眠れる山となつて櫻の梢も雪の夕暮となり「ける人生の冬は、胸に訪ふ死生の響に寒心せしめられ五百羅漢の面貌の上に豈に無常の風の吹かざらんや、世人稍もすれば西鶴を目して紅燈綠酒に耽湎せし風流漢を以てし、人生を肉慾にのみ解釋せしめし市井の放浪兒となせども、尙一點耿なる情緒此に至りて胸の蓮の如くに開くを見ざるは何ぞや、西鶴豈に折花樊柳を以て人生の全般となすものならんや、乞ふこれを其辭世に見よ、

難波俳林　松壽軒西鶴

六、俗間文學並に遊俠の死生觀

辭世　人間五十年の夢りそれさへ
　　我にはあまりたるに
　　ましてや
浮世の月見過しにけり末二年

元祿六年八月十日五十二歲

以て其風貌を察するに難からず。

浪華に於ける二文豪が死生觀は稍之を窺ひしを以て吾人は更に眼を轉じ、閑寂を以て其正眼法藏を刮き、正風俳偕に檀林を改革せんとせし芭蕉翁が感想を知らんとす。

芭蕉が古池の一句を以て檀林を去り、閑寂清雅の想を行るに十七字詩を以てし常に一簑一笠海内に行脚して以て風餐露沾、淡々水の如き生涯を送りしとは皆人の知る所にして、足到る所筆常に從がひ、從遊の子弟三千に餘り、其一言一行は常に記錄されしものから行實の大概は殆んど遺憾なく盡されしにちかし、吾人は彼が一代の秀句を引ねて此より彼が

人生に對する思想を探ぐるの繁を避けんとす。蓋し彼が片言隻辭仔細に見來れば人生の表裏全く這裡に含蓄せられたればなり。

芭蕉が中心の思想は禪に由りて皷吹さられし圓寂の觀念が尙ほ一分の執着を脫せずして胸中の磊塊こゝに俳諧のなれるものか、翁一代の秀句とたゝへらるゝ、

枯枝に烏のとまりけり秋の暮
道の邊の木槿は馬に喰れけり
古池に蛙飛び込む水の音

等の諸句一として枯淡高雅の趣、脂粉の氣を脫し、兒女の情を謝し、中懷淡きと水の如からざるものなし、宛然として是れ一個禪門知識の提撕を思ひ起さしむ。高門其角は翁が孤獨清貧の由來する所を道破して

天和の頃ならん武江の草庵に急火の難にかこまれ、潮水ひたる笘をかつぎて煙のうちに生のびけん、是ぞ玉の緒のはかなきためしなるや、

爰に猶如火宅の變を悟り、應無所住の心を發ちて、其次の年は甲斐の

山里に身をかくし、富士の雪のみつれなければや、三更月下入無我と
いひけん昔の跡もなつかしければ云々。

と言ひけんもの眞に師翁の肚皮裡を透見したるものなるべし。されば翁が終焉は一俳人が臨終と云はんよりは寧ろ行解双遠の比丘衆の示寂にも
まして執着の稀なるを現はす、門下の手になれる終焉記によれば翁は元
祿七年の秋痢を浪華に病み之を看護せる門下の辭世を乞ふに答へて、

「昨日の發句はけふの辭を、けふの發句は明日の辭世、吾生涯いひ捨て
し句々、一句として辭世ならざるはなし、もし、我辭世いかにと問ふ
人あらば、此年ごろいひ捨おきし句、いづれなりとも辭世なりと申給
はれかし、諸法從來常示寂滅相、これは是釋尊の辭世にして一代の佛
教此二句より外はなし、古池や蛙飛こむ水の音、此句に我一風を興せ
しよりはじめて辭世なり、其後百千の句を吐に、此意ならざるはなし
こゝを以て句々辭世ならぬはなしと申也。（惟然手記）

彼は常に臨終正念に住したりき一呼一吸を以て其最後の一呼一吸となし
ぬ、畢世の句々浮華纖麗の病弊なきは、蓋し是が爲なり、十月十二日終
焉の近づくに及び、

かねては閉こもり玉へるが、隔ての障子も襖も取離させ、去來、其角、
丈草をこれへと招き給ひ、穢を憚かれば咫尺し玉ふなとゝわり、行水
を望み玉ふ、（中略）座を靜に改め木節か醫術を盡されしとなどつと〳〵
に謝し給ひ、さて三人の衆を近く召れ、乙州、正秀を左右にし先づ惟
然に筆とらせ亡き跡のこと細々と遺言し玉ふ、病苦少しも見え玉はず
人々奇異の思をなしたり、（中略）云ひ玉ひて餘言なし、合掌正しく、觀
音經と聞えて、かすかに息のかよひも遠くなり、申の中刻すぎて埋火
のあたゝまりのさむるが如く、次郎兵衛が抱き參らせたるによりかゝ
りて、紅顏うるはしく眠れるを期として、物うちかけゝり、時に元祿
七年甲戌年十月十二日御歳五十一歳也。（惟然手記）

元祿の世は豪縱を以て其特色とし放逸奢侈の風、雄華放膽の氣一世に
横溢せし時代なり而してこの間に天は一芭蕉を下して別に風羅の一乾坤

を開き、幻住庵裡、世相變遷の泡沫を觀せしめたり、芭蕉は時代の反抗兒なり、然り而して無分別なる同時代に於て無分別なる標本を以て自ら任じ、長安街上六法の響を爲し市井任俠の意氣を一身に聚めしものを町奴となす、元祿の放縱豪奢、武道漸く武士の間に忘られたるの時、死を見る事飯するが如き意氣は下りて素町人、町奴の胸裡に入り三尺無反の大刀を伊達には佩かぬ男達を生じき、坊間傳ふる所の幡隨院長兵衛之なり、大口屋曉雨これなり、其行實は稗史小說に理想化され、面帕深く閉して之を詳にするを得ずと雖も、然れ共彼等が義理を重んじ死を輕んじ、一言の然諾水火をも尙辭せざりし意氣は蓋し豪放活達なる元祿の所產として恥かしからざる唯一の驕兒なり。彼等は死を輕んじたり敢て死生命なりと覺悟せるには非ざれど、男子は義理に死すべきを以て偉大なる行動なりと思ひしが故なり、幡隨院長兵衛の好敵手たりし旗下の士水野十郎左衛門又當代の驕兒、彼れ死するに望んで曰く、

水野十郎左衛門

氣の詰る娑婆に中々居たくない

地獄の底へ所替せん
落すなら地獄の釜をつんぬいて
あほう羅刹に損をさすべい

何等の放膽、何等の豪縱ぞ、怯懦の氣終に求むるに由なきを見るべし、元祿の治世を語るものは市井遊俠の徒が豪放を知らざるべからざるなり。元祿の華奢風流は其勢として安永天明の墮落時代なきを得ず、享保の中興こゝに於てか興り、寛政に至りて再たび德川文學の一大人を得たり。曰く曲亭馬琴即ち是れ。

曲亭馬琴

馬琴一代の著作四百餘卷、一言以て之を盡せば曰く因果應報と忠孝仁義なり、彼は儒敎の五倫に雜揉するに佛敎の善因善果を以てし、彼の語に從へば勸善懲惡を以て其の標語とせりき、從つて死生に對する感想は儒敎が敎ゆる死生命あり底の觀念に前世の業果を以てし善人は善果を稟け惡棍は惡果を受け、積善の家に餘慶あり、積不善の家に餘殃ありと信せりき、彼一代の著作は蓋しこの一標語より演繹し來れるものゝみ、而

して殘酷の死を爲す者は常に惡人にして、善人は末終に榮ふるに定まれり、加ふるに天地間に澎湃せる一個の靈能は善に幸し、惡を懲す、「八犬傳」然り「弓張月」然り、「美少年錄」然り。

儒學によりて育まれ仁義禮智信は馬琴に由りて我武士道の忠孝悌の三行と一致してこゝに八犬士ありき、儒學の天命說は佛敎の三世因果說と合致して因果應報論及び自然人事の制裁となりき。而して死生は自然と人事の制裁、因果應報の然らしむる所なり。馬琴の思想が我國幾萬の讀書子に斯る道德的思想を寄與したりしは元より言を俟たず、延いては武士道の精華を開發せしむるに効果ありしことは蓋し思半に過ぎん、馬琴の晩年は黑船の來れるときに際し、德川幕府が一轉して土崩瓦壞せんとする時に當りき、然して賴氏の日本外史が上梓せられし頃は馬琴が一生の心血を著作に注ぎし時代なりき、一代四百餘卷の著述豈徒爲にして止むものならんや、何等かの貢獻を我上下に與へしは蓋し明らかなる事實には非ざるか、儒學の勃興は死生有命の說を上層に漲らしめ、其說を具

體化せし馬琴の著作は中下層に上天の制裁を敎えしなり。

其他滑稽洒脫を以て一世を笑殺せし十返舍一九なり、

此世をば御暇乞と線香の
　煙と共にハイ左樣なら

これ實に彼れが此世に最期の滑稽を遺し。蜀山人が、

醉世將夢死、七十五居諸、有酒市舖近、盤餐比目魚。
　時鳥鳴つるかた身初松魚
　春と夏との人相のかね

といへるの類枚擧に遑あらず。

(七) 吉田松陰及び勤王諸士の死生觀

滿眸白皚々、しかも其下には春艸の芽々として雪を排して萌え出づるあり。太平夢濃かに德川武士は御代御萬歲を唱ふる時に當りて早くも革命の氣運は熟し來り、內には勤王の說となり、外には攘夷の論となり、

佐久間象山と吉田松陰

山縣大貳、竹内式部は前者の先驅を爲し、林子平は後者の指導となりて奇禍を買ひ、爾來勤王攘夷は志士が論議の主題となり、維新革命の氣運は漸く熟せんとす、此時に當りて吉田松陰は長門萩の城下に生れぬ、實にこれ天保元年八月四日にして大鹽中齋が兵を擧ぐる前七年なり、請ふ松陰が事蹟と感想とを併叙して此時代に於ける志士が死生觀を代表せしめよ。

松陰幼少にして剛邁敢へて人に服せず、長じて四方に遊寓し、終に江戸に入り佐久間象山に師事す、象山は信州松代の人、夙に王陽明學を奉じ、豪然一世の師表を以て任ず、松陰これに推服して其威化を取くること少からず、共にこれ慷慨の士、内に士風の頽廢を憤り、國威の不振を嘆く、當時國禁あり、海外に出づるを得ず、然れども松陰私かに海に航して泰西の文物を視察し以て他山の石となさんとするの意あり、象山も亦之れを慫慂す、安政元年、米艦下田に來るや、機乘ずべしとしこれに搭じて志を遂げんとす、しかも事成らずして幕府に送られぬ、幕府は國禁を犯したる者として是れを獄に投ず、象山も亦坐して囹圄の苦を受くるに至れり、象山獄中に省譴錄を著はし縱ひ予れ今日死するも天下後世、當に公論あるべし、予れ其何をか悔い何をか恨みんと云ひ、其想を練りぬ、以て彼が死生に煩累せられざるを見るべし、獄中より一詩を松陰に與へて曰く、

寄語吾門同志士、　勿因榮辱負初心。
已把死生付餘事、　事因榮辱負初心。

と、松陰これに答へて曰く、

已に死生を把て餘事に付す、これ象山松陰等が死生の巷に立ちて冷然たりし所以か、後、刑定りて松陰は長門野山の獄に下され、居ること一年、許されて家に蟄居せしめらる、檻裏の猛獅は稍自由を得たり、彼れは何事をか爲さゞるべからず、安政三年七月彼れは松下村塾を開きて家學を敎授しぬ、彼れの家は代々山鹿流の兵學を傳ふ、彼れ夙に家學を繼承し、經史に於ては、別に又大に得る所あり、先づ士規七則を定めその

中に曰く、

死而後已の四字言簡にして義廣し、堅忍果決、確乎拔くべからざるもの是れを舍て、術なきなり。

と、專ら士風を督勵す、來りて茲に學ぶ者皆な松陰が意氣を感じ、悲歌慷慨、國士を以て任せざるなし後年維新改革の健兒は實に多く此村塾の中に養はれしなり、然れども猛獅豈に此の如くにして止むものならんや。彼れは勤王の大義を唱道して屢ば京都に策を献じ、藩主に言を上り、進んで幕府の老中間部詮勝を殺し、京師の公卿大原重德を慫慂してこれを長州に下向せしめ以て藩主をして勤王の旗を上げしめんとせり彼れは此壯擧に手を染むるに至らずして、長藩は「御聞込の趣有之」とて獄に下せり何等不得要領の罪名ぞ、國事多端、而して一の爲すべきなし、彼れ豈に無聊に耐えざらんや、自らいふ「死已無名生亦愧、英雄有恨訴蒼天」と、煩悶の情察すべきなり、遙かに書を佐久間象山に致して「丈夫死所何處か最も當る」と問ひ、且つ曰く、「僕今ま生きて益なし、死するに所なし、進退維谷る云々」といひぬ、然かも彼れは其答を得る能はざる以前に於て、江戸檻致の命を聞くに至れり、彼はこゝに意外の死所を得たりしなり。

鳴かずあらば誰かは知らん杜鵑

さみだれ晴く降り續く夜は

と吟じ、死を決して江戸に送られぬ、彼れ江戸の獄中にあつて死生を觀じて曰く、

今日死を決するの安心は、四時の循環に於て得る所あり、蓋し彼の禾稼を見るに、春種夏苗秋刈冬藏す。秋冬に至れば人皆な其歲功の成るを喜び、酒を造り醴を爲り、村野歡聲あり、未だ曾て西成に臨んで歲功の終るを哀むものあるを聞かず、吾行年三十、一事成ることなくして死して禾稼の未だ秀でず實らざるに似たれば惜むべきに似たり、然れども義卿の身を以ていへば、これまた秀實の時なり、何ぞ必ずしも哀まん、何となれば人壽は定りなし禾稼の必らず四時を經る如きに非ず十歲にして死するものは十歲中自ら四時あり、二十は自ら二十の四

時あり、五十百は自ら五十百の四時あり、十歲を以て短とするは蟪蛄をして靈椿たらしめんと欲するなり、百歲を以て長しとするは靈椿をして蟪蛄たらしめんと欲するなり、齊く命に達せずとす、義卿三十、四時已に備はる、亦秀亦實、其秕たると其粟たると吾が知る所にあらず、同志の士其微衷を憐み、繼紹の人あらば即ち後來の種子未だ絕へず、自ら禾稼の有年に恥ざるなり、同志其是を考思せよ。

こは、これ彼れが留魂錄中に遺す所、天命を安んじて敢て惑はざるもの造詣の深きものにあらずんば、焉ぞ此の如きを得んや、彼れは種子の斷絕せざるが如く、自己の志を繼ぐものゝ出でんことを欲せり、更らに其妹に與へたるものを見んか、

扨て其死なぬと申すは、近く申さば釋迦の孔子のと申す御方には、今日まで生きて御座る故、人が尊みもすれば難有がりも、おそれもする、果して死なぬではないか、死なぬ人なれば、繼目も、ひとやも首の座も、前に申す觀音經の通りではござらぬか楠正成公ぢやの大石良雄ぢ

やのと申す人には及ものに身を失はれ候得共、今以て生てござるのは、刀のだんだんに折れた證據でござる云々。

と彼れは肉體の死をいはずして社會的生命をいへり、彼れは肉體の死を顧みずして社會的に生きんことを願へるに似たり、彼れ別に七生の說あり、一層明確に其觀念を窺ふに足る曰く、

天の茫々たる一理ありて存す、父子祖孫の綿々たる一氣ありて屈す、人の生や斯理を資して以て心となし、斯氣を窒けて以て體となす、體は私なり、私に殉するものを小人となす、故に小人は體滅し氣竭くれば即ち腐爛潰敗復た收むべからず、君子は心と理と通ず體滅し氣竭きて理獨り古今に亙り、天壤を窮めて未だ嘗て暫くも歇まざるなり、今聞く贈正三位楠公の死するや、其弟正季を顧みて、曰く死して何をかする、曰く願くは七たび人間に生れて以て國賊を滅せん、公欣然として曰く、先づ吾心を獲たりと、相刺して逝く、嗚是れ深く理氣の際に見るあるか、此時に當りて正行正朝諸子は則ち理氣並び屈するものなり、新田菊池の諸族は氣離れて理通ずるものなり、是れに由り、之れを言へば、楠公兄弟徒に七生のみならず、初めより未だ死せざるな

り。是れより其後忠孝節義の人楠公に興起せざるものなし、則ち楠公の後復た楠公を生ずるもの固より計り數ふべからざるなり、何ぞ獨り七たびのみならんや。余嘗て東游三たび湊川を經、楠公の墓を拜す、涕涙禁ぜず、其碑陰明の徵士朱生の文を勒するを觀るに及んで、則ち復た涙を下だす、嗚、余楠公に於て骨肉父子の恩あるにあらず、師友交遊の親あるにあらず、自ら其涙の由る所を知らざるなり、朱生に至りては則ち海外の人、反りて楠公を悲んで吾れ又朱生を悲む、最も謂はれなきなり、退いて理氣の說を得たり、則ち楠公と朱生及び余の不肖皆斯理を資して以て心となす、則ち氣關せずと雖も、而も是は則ち通ず、是れ涙の禁ぜざる所以なり、余の不肖聖賢の心を存し、忠孝の志を立て、國威を張り、海賊を滅するを以て妄に己れが任となし、一跌、再跌、不忠不孝の人たり、復た面目の世人を見るなし、然れども斯心は已に楠公諸人と同じ、斯理安んぞ氣體に隨ひて腐爛潰敗するを得んや、必ず今後の人をして亦余に觀て興起せしめ、七生に至りて後可なりとなすのみ、噫、是れ我れにあるなり。七生の說を作る。

彼れは楠公の生命を以て社會的に永續するものとし、これを理想化して、この說あり、彼れは肉體の腐爛を問はず、問ふ所は、理氣の貫通のみ、こ

こに於て彼れの死生に對する觀念は明白となれり、獄中より高杉氏に與る書中に曰く、

僕去冬以來死の一字大に發明あり、李氏焚書の功多し、其說甚永く候へ共、約していはゞ死非所好、亦非所惡、道盡心安、便是死所、世有身生而心死者有身亡而魂存者、心生死無益也、魂存亡無損也(中略)死して不朽の見込あらば、いつでも死ぬべし生て大業の見込あらば、いつにても生くべし、僕が所見にては生死は度外に措て唯言べきを言ふのみ云々。

と、果然彼れは唯だ死をのみ望む暴虎者流にあらざりしなり、不朽の見込あらばいつにても死ぬべし、大業の見込あらばいつにても生くべしと、何ぞ夫れ壯絕なる。安政六年十月二十七日、彼れは終に斷頭臺上の露と消えぬ、其辭世に所謂

身はたとへ武藏の野邊に朽ちぬとも
とゞめおかまし大和魂

の一咏は彼れの死生觀の縮寫なり。彼れは肉に死して靈に生きんと欲したるなり。死する前七日、書を父兄に致して曰く、

平生の學問淺薄にして至誠天地を感格すること出來不申、非常の愛に立至り申候、嘸々御愁傷も可被遊拜察仕候。

親思ふ心にまさるおやごゝろ
けふのおとづれ何ときくらん

と、至誠を吐露して人情の琴線に觸る、誰かこれを讀んで泣かざらん、彼れの人格を想望して彼れの死生觀を味ふ、吾人は無限の感慨なき能はざるなり。彼れ死して彼れは死せざりき、彼れの門下よりは續々小松陰を生せり。維新の大業は實に此小松陰の手によつて成れり、彼以て瞑すべきか。

生を捨てゝ義を取る我が武士的精神は幕末に至て爛熟の花を開き、壯烈の談、懦夫をして起たしむるもの少なかず。圓頂方袍の身、志を勤王の士と共にしたる清水成就院の月照の幕吏に迫はれて近衛邸に潛むや、

自ら以爲らく、

我れ王事に盡くして幕府の忌む所となる、これ命の窮せるなり、好し從容縛に就き、法廷に立て丹心を吐露せん。

と、近衛公これを南洲に托す、南洲伴ふて伏見より船に搭じ、大阪に下らんとし、月照にいふて曰く、「萬一の事あらば潔よく死を決せよ」と。月照笑つて曰く、

予の死生平生に於て已に定れり。豈に今日の危地に臨みて死の決すべきものあらんや、

と共に大阪に至り、更らに九州に下り、事、志と違ひ、終に南洲と相抱薩摩灘に投ず、其絶命の辭にいふ、

曇りなきこゝろの月も薩摩潟
沖の波間にやがて入りぬる

大君のためには何かおしからん
さつまのせとに身は沈むとも

忠烈の氣、言外に溢るゝを覺ゆ、時に安政五年十一月十六日なり。不幸月照死し幸に南洲蘇生す、南洲後に追懷の詩あり。

相約投淵無後先、豈圖波上再生緣、回頭十有餘年夢、空隔幽冥哭墓前。

重野成齋氏の「西鄉南洲逸話」にいふ、

南洲は三日三夜、人事不省であつたが、凡そ三日目に人事を覺えるやうになり、正氣になつてから、投海以後のことを聞き、「さて〳〵殘念な事をした。和尙を獨り死なして、自分一人死に損ひ活きて居るのは殘念至極だ。士の劍戟を用ゐずして身を投げるなどと云ふことは、女子のしさうなことで、誠に天下の人に對しても、言分けがない。唯和尙は法體のことであれば、劍戟を用ゐずして死んだ方が宜しからうと云ふ考で、投身したけれども寧そ死るならば、初めから劍戟を用ゐたらば、よかつたに、女子のなすやうな眞似をして、自分獨り活き殘つて面目次第もない」と云ふて齒噛を爲し、涙を流して拙者に話した。

と、南洲の一生は今を必ずしも叙するを要せず、彼れは維新の元勳として大業を翼成し、後、城山一坏の土と化しぬ。彼れの鹿兒島に歸りて私學校を建つるや、

一　道同じく義協ふを以て時に集合す、乃ち益す其理を研究し、道義に於ては一身を顧みず、踐行すべし。

二　王を尊び民を憫むは學問の本旨たり、乃ち此理を究め王事民義に於ては一意難に當り必ず一同の義を立つべし。

といひ、常に人に語りては、

道を行ふものは天下擧て毀るも足らずとせず、天下擧て譽むるも足れりとせざるは自ら信ずるの厚きが故なり。

といひ、毀譽褒貶に心を動かさず、死生に變節せざるものにあらずんば大事を成す能はざるをいひては、

命もいらぬ、名もいらぬ、官位もいらぬ、金もいらぬ人は仕末に困るなり、此仕末に困る人ならでは難難を共にし國家の大事を成すこと能はず。

といへるは人口に膾炙する所、十年の後、全く殘骸を子弟に擲ちて又毀譽を問はず、眞丈夫と云ふべきなり。

南洲と併稱せられたる木戸孝允、彼れ曾て人の未來の有無を談ずるを評して之れ曇天に晴雨を論ずるもの、晴といひ雨といふ、共に斷定し難し、寧ろ雨時の用意を爲すの誤なきに强かざるが如く、有といひ無といふ、もと確答しかたし、寧ろ有として之れが準備を怠らざるを要するのみと、詩あり、以て其死生觀を見るべし。

千里江山落眼中、眼中江山幾千里、山自幽靜水自清、日々相對我心喜、
天地至美人不知、人不知處乃至美、大道孤行又何妨、聖賢作用無定止、
達人有氣元浩然、始終不問生與死、君子如愚小人智、一時名利不足恃、
只此天眞誰禁取、可憐世情薄如紙、分明心中判有非、欲託生涯江山是。

と、其他傳ふべきもの少からずといへども、今は之れを略しぬ。

結論

第一章　科學の發達と死生觀の變遷

(一)　十九世紀に於ける科學の發達

吾人は再び眼を歐洲に轉じ近代文明に就て一瞥せざる可らず、想ふに吾人が前半生を托したる第十九世紀は近世文明の最初の光明たる宗教改革及び文藝復興が羅馬教會の羈絆を脱し、人間自然の本性自我の放釋の爲に奮鬪せし餘勢を承け、舊文明舊學術を排し、毅然として幾多の難問を會通し、以て自然人生の兩界に横はれる事象を解決せんとしたりき。而して十九世紀に於ける唯一の進歩を遂げしものは經驗と推理とを重んずる自然科學にして其發達の速かにして影響の大なりしこと殆んど他の諸學術に超絶す。物理、化學、生物學、地質學の發達は前代まで朦朧た

る暗雲の中に閉ざされし諸問題を解決すると共に、古生物學の發達に資し、基督教文明の教ゆる世界觀、人生觀の根底を動かし、進んで形而上學の諸問題をも自家の研究材料と爲して之を大成せしめ、終には進化論の基礎を確立して現代の人心に別途の自然人生觀を寄與し、生命の問題をも之に由りて解決せしめんとしつゝあり。されば死生の問題を研究して此に至るや吾人は又近代科學の勃興と基教的死生觀の動搖とを講究せざる可からず。

基督の教會が自家の教條を掩護せんが爲めにコペルニカス、ガリレオが天體運動の發明を以て異端なりとし斯學の研究に必要なる望遠鏡をも公然使用するを嚴禁せしが勃興の機運に向ひし天文學は到底教會が手を以ても之を抑壓すると能はず、一千八百五十九年キルヒホッフ、ブンセン兩氏の發明に係るスペクトラム分析によりて天體の物理的化學的性質を明にすると共に、望遠鏡を以て宇宙の一角にありて一種の方向に廻轉する原始星霧の存在せられつゝあるを發見したりき。即ちかの星霧は熱

せられたる瓦斯の體にして今何等かの運動を爲しつゝ一の遊星體系を組織せんとしつゝあるなり。星霧の發見はカント、及びラプラースが唱導せし宇宙開闢の原始、星霧假說の可能を證すると共に舊來墨守し來りし基督教の開闢說を破壞せんとせり。既に說きしが如く基教の說く所及び基教に準がふ古來の學說に由れば、我宇宙世界は其始め、神が七日の間に成就せしものに係り、今現に世界に存する動植の物並びに人間も又神の手に成り、生物の生命は神の吸息に由りて其始めを爲し、神恩に背きし原罪を以て死を得たりと教へ、其訓誡を金玉の科條として準守し來りしが、カント、ラプラース等の稱導する所に從がへば、宇宙の體系及び其狀態を觀ずるに、我太陽系統の原始は決して一日若しくは數日にして成就せしむべき性質のものに非ず、其始めはかの天の一角に浮べる星霧が各分子間の疎密よりして收縮の際に於て一種の運動を始め、自己の重力の爲に球狀となりて自轉を起したりき。而して其自轉の速度容積の收縮と共に增加し、兩極に扁平を生じ遠心力重心力の平均は其赤道部に星

霧狀物質の環を分離しぬ、今現に土星が其赤道部に有する環は蓋しこれなるなからんや。分離せし赤道環は尙前と同一なる方向に運動を續くれども中道にして破碎し、速度の差異の爲に集合して別に一の球體を生ず、この球體又再び赤道環を生じ、赤道環又再たび分離して一個又は數個の球體と成る。我太陽は蓋し其原始一の星霧なりしが自轉して遊星を分離せしめ、遊星又衛星を分離し、而も相互重力の關係は今に至る迄太陽を中心として秩序ある運動を爲しつゝあるなり。熱せられし星霧が收縮して太陽となり、各遊星となり、遊星は衛星を分離したりとせば、其始めは星霧と同じく一の瓦斯體の時期を有したりしなり。この瓦斯體は久しき年月を經る間に收縮に連れて光と熱とを空間に輻射して冷却を始むる事恰かも現時の太陽の如かりき、冷却一定の度に至るや、瓦斯體なりし硅酸鹽類は凝固して球面を掩ひ、其上に位する食鹽の瓦斯次で下りて食鹽の層を爲し、第三にありし水蒸氣食鹽層上に沈降して水を爲しぬ。而して最上層に位する酸窒素の瓦斯は今現に球體を掩ふ、即ち是れ地球の現在に非ずや、若し夫れ熱を放散すること我地球よりも速かに地殼の變動、氣温の變化激しきに及べば生物の種を失ひ、漠たる一個の死滅球を成すべし、即ち是れ月球の現在には非ずや。

宇宙觀の變遷

而して星霧が變遷して太陽となり、地球と進み、月球と變ずる間に費せし歲月は殆んど我等が想像だも及ばざる古へにして、茫漠たる時間の前なりと雖ども、然れども其理論の根底は一々實驗の基礎を有し、決して空漠なる臆說を以て築き上げし獨斷に非ず。若しこの說にして眞ならんか、宇宙は刻々として變遷進化をなし、一日として舊態を存するものに非ず、昨の宇宙は今の宇宙と異り、已に滅し行く天體あれば新たに生れ來るものあり、生滅發展瞬時も休まず、而してこの生滅的天體を抱容する宇宙は上に始なく下に終なし、無限の空間にありて永却無窮に轉變す。

宗教と科學との衝突

前代の哲學者は宇宙を以て始終も根原も無く往古の狀態は嘗て變ずることなくして今に傳はると敎へ、基敎は現在の宇宙世界を造物主の創造

一　十九世紀に於ける科學の發達

に飯したるが、星霧說にして勢力を得來るに於ては當然其不眞なるを露呈せざるを得ず、前代の哲學は前世紀に於て何等の勢力を有せざれども基敎に於ては即ち然らず過去千有餘年の因習牢として拔くべからざるものあり、此に於てか宗敎は科學と衝突しぬ。

前世紀に於ける科學の進步は獨り天文學のみに止まらず、我等が住する地球の過去に對しても又大なる研究を遂げき。地球の皮殼を成す地層は其層の異るに從がひて現在の世界に見るを得ざる種々の化石を出す、而して層同じき所には同一型の化石を產し、其發見決して偶然ならざるに至るや地質學古生物學は俄然として長足の進步を成したり、即ち地球が星霧より分離して冷却し漸次に地殼を生ずるや、有機體生存の第一條件たる水に圍繞せられ、水は空氣の風化作用と相俟ちて、地皮表面を變化せしむると頗る永く、山を削り海を埋め、褶疊の作用を爲し熔岩を迸らし、現在の世界となる迄に幾度か世界あり而して生物ありき、古代の地層の上に發見せらるゝ生物の化石は蓋し前世界生物の遺骸にして、現

世界の生物は蓋し前世界の生物に非ざりき、若し造物主にして山あれ、河あれ、野に獸あれ、森に鳥あれと呼びて之を創造せしものとせば、造物主は果たして何れの世界を創造せしぞ、現世界の生物が神の所造とせば化石として發見せらるゝ生物は果して何人の手にか成れる。古生物學、地質學の進化に連れて實驗上より證明せし這固の難問に對しては、基敎の敎ふる所は當然双關矛盾(ザレンマ)に陷らざるを得ず。

既に前世界あり、前世界に棲息せし生物ありとすれば續で生起すべき問題は蓋し新らしき人間論に非ずや。人間は果して神の手に由りて創造せられしか將又天體、地球及び前世界の生物の如く、人間以前の生物より進化發達したるものなりや。基敎は人間の生命を以て神の與へしものとなし、中世に至りては人間の顏面は Homo dei(神の人)といへる六個の文字より成れるものにして自ら神の人なることを證明しつゝあるなりと敎え、人間が世界に於ける地位は決して他の諸動物と同じからず、人間は一切地上生物の豫定的中心及び目的にして神は自體に似せて人間を創造

し、人間はホモ(Homo)といへる一科に屬すべきものなりとせりき。されど既に地上の生物は前世界の生物と同じからず、發見せし化石の痕を傳ふて今に及べば確かに生物が進歩發達し來りし證左歴然たるにも關らず、人間のみが宇宙開闢の始より現時と同一の形體を有すべき理なきにはあらずや。さらば人間が原始の狀態は如何、蓋し是れ當然生起し來るべき問題には非ずや。加之、前述諸科學の進歩につれ生物學又頗る進捗し、各生物發生の狀態を比較し、有機體を組織する細胞を發見すると共に、曾つては實驗を輕視せし形而上的の學術又科學の研究方法を採用し、此等の學術と相提携して終に別に一個の人間論を建設するに至りぬ。是に於てか舊代の生命及び死滅に關する觀念は根底的に一大動搖を感せざるを得ず。

宇宙間に横はれる一切萬法の生起を神に歸し、生命の原始を神の呼吸なりと思ひ其間に何等の研究をも挿まざりし泰西の死生觀が經驗と推理とを以て研究を續くる科學の勃興の爲に影響せらるゝは元より自然の數にして深く怪しむに足らざるとなれども、然れど千有餘年民人の思想として存在せしものは一朝にして之を破壞し了ること能はず、衝突は衝突を生じ、研究は微細に入り、從つて幾多の證左を齎らし、終に一の結論に到着歸納したり。即ち是れ舊代の死生觀を破壞覆滅せしめ、別に新らしき觀察を自然と人生との上に試み、生命、死滅、變化の觀念を樹立せんとするの努力なり。第十九世紀科學の發展は實に此に至りぬ。然らば其新らしき努力とは何ぞや、曰く進化論これなり。

舊代死生觀の覆滅

(二)　進化論の死生觀

進化論が諸般の學術を風靡して翕然として之に歸せしめし事は恐らく第十九世紀に於ける一偉觀として見るべきものならんか。進化論はチャールス、ダーウヰンに於て其立脚地を占めたり、されどダーウヰン以前科學が漸次に進歩せし痕を踏みて此論の地歩を成したるは佛蘭西のラマルク、獨逸の詩人ゲーテ及びチャールス、ダーウヰンの祖父エラスムス、

ラマルク

ダーウヰンを數へざるべからず、ゲーテが死生觀は已に之を說けるを以て今贅するの要なし、されど進化論の歷史を語るに當りてはラマルク其他ダーウヰン以前の諸學者を逸すると能はざるなり。

一千八百〇九年ラマルク(Lamarck)の名著動物哲學上梓せられ、動物種族變遷の論之によりて公にせられたるが、ラマルクの論ずる所に由れば、「熟ら動物の肉體構成を驗するに其孰れを見るも皆其生活狀態に適應せし身體を有す、空を翔くる鳥に翼あり、地に潛む鼴の掌は大に、馬は蹄を有し、昆虫は長き跂を有す、而して是等各種の異れる構造を驗するに當りては皆同一の模型を有し、初めより特に異型に創造せられたるに非ず久しき歲月の間にありて其生活の狀態に適應せしめんが爲に漸を追ふて變化し行き終に各種の異型を有するに至れるなり、即ち常に之を用ふる機器は漸次に進步發達し行きしに過ぎず。之に反して常に使用せざる器官は漸次に廢滅に皈し行き、終には之を有せざるに至る。動物の各種類は永久の年月の間に器官の用不用の原因の爲めに漸次に變遷し來り終に現時の種類に到達せしものなれば初めより各種の生物が儼として世に存せしものにあらず。」と云ふにあり。

キユビエ

當時一般の社會は基敎的創世說を信じたりしを以てラマルクが動物種族變遷の說を歡迎せざりしのみならず、學界は才智學識を具ふると信せられしキユビエ(Cuvier)が地球變動說を信じ、各種の化石は天地開闢以後幾回かの激變によりて埋沒せられし遺骸にして天神の生物創造は其度に此土に行はれ、前代の生物は後代の生物に代りて生じたるものとせりき。

ライエル

從つてラマルクの說は一般に信用せらるゝことなくして已みしがラマルクに次で出でし英のチャールス、ライエル(C. Lyeel)が「地質學原理」は生物發達史上に看過すべからざる地質上の實驗よりして地質の變動を論じ、地球の變遷はキユビエが論せし如く突爾として起りしものに非ず、風水の作用、火山の爆發、徐々として地表を變化せしめ、日々に其地層を積みしものにして生物の變遷も又從つて徐々に起りしものなりとせりき。ライエルが地質學上の論は、一面に於てカント、ラプラスが稱道せし星

霧說を證明すると共に、他面に於て生物進化の理法を發見するの先驅をなせしが、越えて一千八百五十九年には進化論第一の名著チャールス、ダーウィンの「種源論」發布せらるゝに及び、こゝに初めて生物進化の理法を確立するに至りしなり。

自然淘汰既

ダーウィン(Charles Darwin)が生物進化の理法は略ワレスと同時に稱道し出でしものにして、前代よりありしラマルクの器官の用不用說及びサンチレールの外界變化說以上、別に進化の事象を蒐集し、之を說明するに自然淘汰の說を以てしたり。自然淘汰の說は前代の諸說に優りて生物變遷の事實を說明し得るのみならず、生物學上に於ける事象はこの理法以外に出でざるものを證し得たり。

ダーウィンが生物進化論一たび稱へらるゝや生物學上に於ける凡百の疑問は及を迎へて解決せられ、其勢滔々として諸の科學に及び、終に哲學的體系をも組織して唯物論の根底を爲すに至りしが、進化論より見たる人間の地位、其祖先、生命の原始及び死に對する觀念は如何なるものぞ。吾人は十九世紀に於ける科學の進歩を驗するに當りてこの一科を脫することを能はず。進化論が論ずる所に由れば吾人々類は其原始よりして現時の器官を備へ、同一の祖先より降り來りし者に非ず、實は現時の類人猿(ゴリラ、ウランウータン、チンパンヂー)と同一の祖先より分化し來れる者に外ならざるなり、而して人類の祖先が石器を使用して地球に住するに至りし年代は二十五萬年乃至三十萬年の古へ現世界が未だ一帶の氷原たりし頃にして第四紀の始若しくは第二紀の終なりとす。

人猿同祖

人類を以て類人猿と同一祖先より分化し來りし者とすれば、然らば脊椎動物及び哺乳動物なる一大族は抑も何種の生物より進化し來りしぞ、エルンスト、ヘッケルが論ずる所によれば、哺乳類中の有胎盤類は其祖先を白堊紀に生じ而して有胎盤類は侏羅紀に於ける有袋類より生じ有袋類は三疊紀の一穴類より進化し、一穴類は第三疊紀に於ては爬虫哺乳類として生れ、而して全脊推動物は古生代に於ては實に原索類として生じたりしものなり。原索類以上に溯りて人類の祖先を尋ぬれば、此に至り

て全生物の祖先は全く同一の原始に歸すべし、原索類はプラトデスと云へる想像的の一生物より進歩せり、プラトデスは左右平等にして現時のコンボルタに類似し感覺器生殖器を生じたる時期を名けしものなり。さらばプラトデスの祖先は何ぞ、曰く諸動物の原腸期(ガストレア)に肖たるガストレア(原腸動物)なり、原腸動物(ガストレア)は囊狀に結合せしアミーバ狀細胞の結合より進化し囊狀細胞群體はアミーバの群體より生じぬ。アミーバは其初有核の單細胞が群集せしものにして生物が細胞核を有するに至りし第一の狀態なり。然れども尙一層溯りて單細胞は何者より生命を得來りしぞ、換言すれば一切生物の祖先たる第一の生命は何者が得たりしぞ、ヘッケルに從へばこは細胞中に核を有せざりしモネラ(單蟲)なりと稱す。

モネラは全生物の原始にして其體極めて不完全なる無核の一生物に過ぎず。而して無核のモネラ分化して二となり一はヅーモネラ(動物性無核蟲)となり一はフイトモネラ(植物性無核蟲)と變じ以て全生物の生命第一の原始を爲しぬ。

全生物の地球に於ける第一の祖先をモネラなりとし、さて其第一の生物の生命は如何にして地上に生せしぞ、蓋し千古の疑問は依然として此に横はれり。モネラの發生を以て自然の現象なりとするも如何にして無機物を以て滿されし地上に有機物第一の生物を發せしぞ。

生命の原始に關しては概ね是を二として論ずるを得べし、第一は生物の原始は我地球に初めて發生したるものに非ずして、他の星宿より事に由りて地上に移されしものなりとす、即ち流星に由りて他世界に發生せし生物が、偶然に地上に移され、地上は又其等生物の生活に適應する狀態にありしものから自然に進化發達して永久の年月に現在の狀態たるに至りしと謂ふなり、然れどもこは地上に於ける第一の生命の疑問を遠く他世界に移したるに止まり、疑問は依然として存するを奈何せん、第二は生物の第一生命を自然の力に歸するものなるが、之も未だ確然たる事實を有せざること第一の論と同じ、このダーウヰン及びウヰルショーは生命の根元に關しては明晰なる說明を與へず、ダーウヰンは自著中に名

ヘッケルの生命原始論

言して「根本の精神的勢力、及び生命の根元に就ては終に何等の論をも有せず」と云へり。されど近代の總ての科學者は生命を以つて自然的過程より生じたりとして之れを信じ唯だ實驗的に說明するを得ずとするにあるものゝ如し

現代の進化論者特にヘッケル(Heackel)が有する生命の原始に關する意見は即ち第二に屬するものにして彼思へらく、

(一)、有機的生命は原形質(プラズム)(又はプロトプラズム)中に存す。而してプラズムは其主要なる成分として水又は胥白質を有する粘液性の化學的物質なり。

(二)、この生命ある物質が性質として有する運動は生理的化學的の過程にして溫暖(冷熱の中間)なる一定の制限內にのみ生ず、吾人が所謂生命と號するものは即ちこの運動なり。

(三)この制限を超過すれば有機的生命は其時間內は或境遇の下に潛伏狀態(外見的の死)として保たるゝことあり、然れども其潛伏狀態は或期間に限られ多くは短かし。

(四)我地球を以て之を論ずるに、地球も亦他の星と同じく久しき年月の間は熾熱の狀態にありしを以て溫暖を好む有機的生命は存在するに由なく從つて永久的生命と號するを得ず。

(五)有機的生命第一の條件たる水は地殼の溫度沸騰點以下に降らざれば地上に存するを得ず。

(六)かゝる進化の狀態に初めておかれし化學的の過程には必らず一の接觸作用なかるべからず、この接觸作用は蛋白質の組織を成し、其結果として原形質の組織と成したりき。

(七)是の如くにして創生せられたる原始的有機體は器官を有せざる無構造の有機體たるプラスモトモス、モネラ(無機體より創生せられし有機物)となるを得るのみ、個々に區別せらるゝ生活物は蓋し原形質の同種小球の如きものなり。

(八)この原始的モネラの核の分離、細胞體の分劃より派生せられしもの

こそ第一の細胞なれ。

ヽッケルが說によれば生命は地球が其に適當なる時機に達せし時無機物より發生したること恰かも酸素と水素と相親和して水を生じ、鑛物が或事情の下に結晶體を生じたるが如く或事情の下に於ける化學的作用が相寄りてこゝに生命の根元たるべき原形質（プラズム）を發生したるなり。飜つて思ふに、我地球が白熱熱たりし時代に於て已に諸々の無機物を有し、其無機物は地球が適度の温度を有する時期に至れば一轉して細胞たるべき理化學上の要素を備へたるのみならず、別に細胞の生命を創造し得べき感覺性の基礎を備へたりしなり。而して我地上に存在する一切の無機物も其根本の性質としては何等かの感覺性を有しつゝあるものにしてこの微妙の感覺性は一切生命の根元、自然生殖の本、宇宙萬物の根本第一の性質なり、已に根本第一の性質といふ、故にこの性は温度に關係せずして永劫の古へより存在したるものならざるを得ず。されど一轉して感覺性か生命と變ずるには温度等の周圍の事情に適應せざるを得ず、地上の事情生命の進化に適し、感覺の集中恰かも引力の集中の結果として遊星太陽の生ずるが如くに生じたる時、即ち是れ生命の原始期なり。

即ち有機物の感覺性集中してこゝに原形質（プラズム）を生じ、原形質（プラズム）は單細胞と進み、アミーバの群體、蕊狀細胞群體、ガストレア、プラトデスと變じ、プラトデスは原索類に進み、前に說きし進化の道程を經て一切の生物となりしものなりとす。

生物の體は日々に變化して一日も舊と同じき者はあらず、一切の存在は成壞の連鎖なり、自然の抱ける一切の現象が變遷するは進化論の大敎訓なり、已に生命の源始ありさらば如何にして死滅の現象を生ずるぞや。これに關しては近代に於ける科學者及び進化論者の說一定せざると生命原始論に讓らず、今二三を擧げて之れを驗せんか。近世の生理學者たるヘルヴォルン及びラスウィッは思へらく生命とは頗る錯雜せる原形質の化學的結合の成壞的代謝を行ひつゝある間を謂ふなり、死を以て生命の斷滅とすれば原形質分子間の成壞的代謝又從つて斷絶せざるを得ず、代

ヘルヴォルン

謝作用にして斷絶すれば其分子は結合後直に破滅するに非ずや、即ち死は單に原形質の改造が一時斷絶したるに過ぎず、從つて生命あるものは全く死滅すると能はず、換言すれば生活作用を絶對に斷滅すると能はざるものなりと論ず。ワイズマンは思へらく、複細胞は生滅することあれど單細胞は終に死滅するものに非ず、即ち單細胞と複細胞との生理的差異は前者が死滅せざるに對して後者が死滅するにあり、即れこれ氏が發生細胞論より派生したる論なりとす。

ワイズマン

然らばヘッケルは死を以て如何の現象とせしか、曰く自然的死は生命の遺傳時期が或一定の制限に達せし時一切の有機體に現はるゝ現象なり、と、即ちかの原始的の器官なき生物(有機體は原形質の不可視的化學の組織を有し、而して自ら代謝機能を爲せども、若しこの機能にして止まんか死即ち來る、一切の有機的は新陳代謝の機能を爲し、一定の割合を以て缺乏を補ひ、廢滅を防ぎつゝあり、需要に應じて供給し、供給に連れて需要を爲す、若しこの二力の間に大なる差異を生じ、又は一定せし各

ヘッケル

部の權衡が或一定の限度を超過する時は供給は如何に旺盛なりとするも終に廢滅に歸すること、恰かも器械が一定の年限を以て終に修繕するに堪えざると同じ、有機體も又之に同じく各部の權衡は早晩漸次に廢滅に歸し、皮膜、腺、筋肉、神經、等の組織は硬化、結締して頽廢に及び、代謝刷新の機能も其效を奏せず、自然に死の現象現はるゝに至るあり。一切の生物は偶然の死は之を避くることを得べきも終に來るべき自然的死の現象は免るゝを能はざるなり、ヘッケルによれば生命は終に永久的にあらず。

如上諸家の說を以て之を見れば進化論は殆んど同一の地步よりして出立し、其到着點は或一定度同一なるやの觀ありけれども生命の原始及び死の現象を論ずるに至れば、其思索は各々別途に出で、全く相一致するものなきに似たり、尙終に臨みて吾人は進化論的步調を以て哲學的體系を成したりしスペンサーの死に對する感想を一瞥するを要す、スペンサー(Spencer)は死を以て有機體進化の最終平均狀態となし、有機體を組織す

スペンサー

物質勢力恒存說

る分子的運動を變じて個體的運動を爲す作用の停止する現象を以て死と名け、肉體の衰弱呼吸の沈靜、心臟の休止は、蓋し從來貯藏せし集合的運動が再び分子的運動に復飯するの謂なりとせり、從つて、生は死の反對に非ず、肉といへる外包に含まれし生命の核が相合體して團體的運動を休止し、分子的運動に復歸したるものなりとせり。

上の如く諸家の說を以て之を比ぶれば進化論は殆んど同一の地步より出立し其到着點も或一定の度迄は同一なるやの觀あれども生命の原始、死の現象を論ずるに至れば、思索又微細に入りて一定し難く、寧ろ全く背馳するの觀あり、蓋し科學の職とする所は既知の事實を綜合して以て理論を抽象するにあれど、已に事實の知られざる所に至れば、其見る所各々相異り終に如上の諸論を派生するに至れるなり、從つて物質論に傾けるものあれば、或は一步理想論に入れるものあり、神秘を排して而も神秘に囚はれしものあり、千差萬別の狀を呈す、然れどもこの間第十九世紀の科學に自ら一貫せし思想ありて存す、曰く物質の不滅、勢力の恒存これあり、宇宙に存在する元素は世界未生以前よりして不增不減曾て生せず終に滅せず、元素の化合より成れる物質は隆替錯列して或は生と呼び、或は死と稱するとありと雖ども、この現象の爲に物質界は一毫も增すなく一絲も減るなし、加之、這箇の物質は動靜其何れにあれ、皆何等かの作用を爲すべき勢力（エネルギー）を有す、この勢力は活動、靜止、冷熱の隆替はありと雖も然かも儼として宇宙の間に存在して以て永久の活動を爲す。已に說きしヘッケルの論の如きは一應之に對すれば生命斷滅論に似るも其の生命の原始たるべき感覺性は永劫に亙りて存在し、唯集中の狀態を俟つに過ぎずとなして斷滅せざるものをいひ其他の諸說に至りては已に死自らを以て永劫に繼續すべき不死の生の意義なりとし、死の眞の意義は生なりと論ずるものありて、宇宙を以て一個の機械とし人間を以て動物の一員と貶したる科學者及び進化論者は死を以て自我の潰亂とし生活力の喪失に歸すると雖も、しかも原形質は不斷に相續し、勢力と物質とは永久に壞滅するとなきを論じて未だ一人の死を以て斷滅となすものな

し。

(三)　哲學と科學

進化論を以て思想の根底となし自然人事に渉れる一切の事象を解決せんとしたる努力は疑ひもなく前世紀に横溢したる思索の方法なり。然れども進化論を以て學術界全般の思想を代表せしむるは決して妥當とは謂ふべからず、カントが批評學を公にせしより今に至り、哲學界又多くの龍象を出し敢て一世に標榜したるもの尠からず、曰くヘーゲル、曰くショーペンハウエル、曰くハルトマン、其他の巨匠雲の如く獨逸に蜂出し、史家をして希臘のプラトーン、アリストテレースの盛時に比せしむるの盛を呈したり、從つて如上の諸大家が死生に對する感想及び哲學と科學との關係をも尋ぬるの要あるは又疑ひを容れず。

ヘーゲル

カントの歿後獨逸哲學の巨匠として目すべき者はヘーゲル (Hegel) なり、ヘーゲル (Hegel) 思へらく宇宙人生に渉りて絶對不二の最高定義は精靈なり、一切の哲學、宗教、及び世界の歴史は皆この定義を發見し了解せんとするの努力に外ならず。而して絶對的精靈は吾人が内面的必然の性質より發展せしものなるが故に之を認識せんと欲せば同じく内面的必然の性質によりて發展する思惟過程によらざるを得ず、即ち是れ絶對認識の辨證法なり。此辨證法は三種の作用より成る。宇宙の本體を構成する觀念は先づ單一直接ならざるを得ざれば吾人の理性も亦普遍なる規定によりて之を了解す、辨證第一の作用、肯定これなり、然れども宇宙は終に單一直接を以て止まらず精靈の自己發展せしものあれば精密に之を驗すれば宇宙は單一直接に反對せるものあるを見、從つて第一の肯定作用を否定するに至る、第二の作用、反肯定これなり、されど吾人の思想は單に肯定し否定したるのみにて停止する能はず、必ず之を調和結合せずんば休まじ、即ち是れ第三の作用、綜合肯定の起る所以なり、然るに第三の作用たる新肯定は其中又自らに否定の性質を包含し、又之を綜合肯定するの發展を爲すべしと。ヘーゲル哲學は總じて以上の三作用を有する辨證法

に異らず、一切の事象は皆この三作用を以て優に說明し盡さるべきものにして、人生の生死及び隆替も又この肯定、否定、綜合肯定の三作用を以て辨證するを得べし、例を以て之を示せば純粹の實在を論ずるに當りて、純粹實在は即ち肯定なり、されど純粹の實在は毫も規定と內容とを有せざるが故に純粹無にしてこれ否定なり、而して純粹無は規定內容を有せざれども思想の對象たる以上は純粹實在と毫も異る所あらず、されば純粹無と純粹實在とはこゝに至りて相移りて一の轉化即ち綜合肯定となる。かくして終に宇宙萬有は精神となり、精神は純粹心靈となり、一切の反對否定を融和して有限無限の歸一に到達す。これヘーゲルが精靈哲學の骨子なり。

ヘーゲルの哲學は知識と信仰との關係、神と基督並に個體不滅に就きては多く明晰なる說明を與へずして去りぬ、從つてヘーゲルが辨證の三作用よりして其死生觀のかくあるべきを推論するを得れど、個體不滅の論に至りては、如何樣にも之を解說するを得べし、後年ヘーゲルの學徒

左右兩黨

が左右兩黨に分れて互に相爭ひしは畢竟この問題に對する解說の方法を異にしたるに由るなり、即ちヘーゲル派右黨は個體不滅を信じ正敎主義、超自然論に傾き敎會を以て完全偉大なるものとし、基督を以て實際の人格的神人とし、從つて哲學と宗敎とは同一の內容を有する二形式に過ぎずとせり、之に反して右黨即新ヘーゲル派は神は敎會が敎ふる如きものに非ずして實は常住不變の本體、人間の自覺に由りて達し得べきものとし、個體は必らず不滅なるものに非ず、不滅なるは精神の個體に非ずして普遍的なる常住性のみなり、所謂神人は人格ある歷史上の基督に非ず、人類全體の概念こそ神人なれと論せり、左右兩黨の間に所謂中央黨といへる折衷派を生せしが、左黨はシユトラウス、フオルエルバッハ二氏あり、右者は益々汎神論に傾き、哲學を以て人性學となさんと欲するに至れり、即ちヘーゲルの哲學は其結構の偉大なるよりして、自ら、其中に一神論的思想と汎神論的思想とを包含せしものが、其歿後に至りて別々に發展して、一は精神の個體不滅を信じ、他は普遍的理性を以て不滅と

なし、個體不滅を信ぜざるに至れり。

ヘーゲルの哲學は其死後四十年間汎ねく哲學界を風靡し、最早唯心論的の形而上學に於て其歩を進むること能はざるに至るや、ショーペンハウエル (Schopenhauel) 出でゝ別に厭世的哲學系統を組織し以て哲學史上に新生面を開きぬ。

ショーペンハウエル

ショーペンハウエル以爲へらく、一切の現象界は存在、生起、行爲、認識といへる四種の充足原理によりて規定さる、即ち實在の原理は、位置(空間上の關係)及び次序(時間上の關係)を支配し、時間と空間とは相互に關係し、空間の場合には位置と名け時間の場合には繼起と云ふ。生死の原理は現象をして其原因より正しく生成せしむるの規則なり、即ち無機界にては其原因器械的に働き、有機界にては刺戟的に働き、人類になりては動機として作用す、蓋し動機は一切行爲の原因なり、從つて行爲の原理は前原理の一特例なり。認識の理由は判斷の作用を規定するの規則にして、概念の結合分離はこの原理に由りて起る、而して概念の結合分離は理性の職として掌る所たり。吾人が認識の對象はこの四原理を離れて存するものに非ず。換言すれば吾人が認識は悉く現象界に止まり一歩も本體界に進入すること能はず、一切の事象は時間、空間、因果律の三重の面紗に掩はれつゝあり、空間と因果律との面紗を去りて髣髴として物其自體を見ることを得るは唯自己意識のみなり。自己を客觀的に見れば身體となり、主觀的に觀ずれば意志なり、主觀は物其自體を觀ずるを得とすれば意志は現象に非ずして物其自身なり、而して意志の客觀的觀察は身體なり、さらば自己の身體は意志の發現なり、自己の身體を以て意志の發現とすれば、之を擴大して一切の有機物無機物は亦意志の發現なると共に全世界は意志の發現に外ならず、而して世界の根本意志は時間空間因果の規定を受けず、絶對平等無差別なると共に毫も知的作用を有せざる盲目的衝動なり。

根本意志

根本意志は原來盲目的衝動のものなれども發達して人類となるに及び初めて知識を生ず、然るに根本意志は盲目的衝動なるを以て無限に勝利

を得んことを企て知識を奴隷として之にのみ望を懸くるが故に望蜀の意常に斷えず、煩悶に煩悶を重ね終に何等の滿足平和を得ざるに至り、こに人生の苦痛を生ず、若し夫れこの苦痛を逃れ、平和と滿足とを獲得せんと欲せば到底知識を以て之を捕ふるを能はず、唯自己の意志を否定して人世と苦痛との由て來る所を枯稿して初めて平和と滿足とを得べし、既に自己の意志を否定す、森羅萬象の根源終に有ることなく、絶對の無に飯入して涅槃 (Nirvana) の常樂、平和の境地に到るを云べし。

一切の感情、情緒は勿論努力、願望、快樂、苦痛、希望、恐怖、憎惡、苟しくも吾人心内に起るものは悉く是れ意志の發現なり、而して吾人の生命は意志が生存欲を逞しふするの現象にして死は生存欲の斷滅なり、若し意志をして盲目的衝動を恣にせしむる時は世界は厭ふる錯誤を益々重ぬるを以て吾人の死は寧ろ意志の灰滅を理想とする上より見て決して厭忌すべき現象に非す、寧ろ最高の理想に一歩を進むるものと云ふべし、と。

生存欲の斷滅

ハルトマン

ヘーゲルとショペンハウエルとの哲學を綜合して超絶的實在論を組織せるものはハルトマン (Edward v. Hartmann.) なり。氏の説によれば唯一の絶對的世界原理は其性質として理性と意志とを有す、而してこの二屬性を有する世界的原理は精靈にして其性質たる理性は世界に於ける意識の原因なるを以て意識以前既に存在せしもの即ち無意識なり、而して世界原理の他の性質たる意志は盲目的衝動なるを以て無意識なるは勿論なり、されば世界の根本原理は無意識的精靈ならざるを得ず、この無意識は盲目なる意志の力によりて客體化して世界となりしものなるが、この世界は理性によりて再たび絶對に復歸せざるべからず、是れ世界の大目的なり、從つて世界は未成の時代は善なりしが、客體化して惡となり、再び善に復歸せんと欲するを目的とす。而して此の目的を遂行するは根本原理の一性質たる理性の任なり、ショーペンハウエルは個人の涅槃を以て根本の滿足となせしが、ハルトマンは吾人の生命を以て世界の意志を灰滅せしめ善に復歸するに最も有要なるものとし、吾人が世に存在し生活

科學の哲學的成就

する所以の者は蓋し世界をして最善美の地に復歸せしむる絶對の方便なりとし、個人が現世又は來世に於て滿足平和を求めんと欲するは迷妄なり個人は毫も幸福を求むべき權利なし、唯世界が善美の目的に至る犧牲たるべきなりと云へり。

されば人類の死は何に由てか起る、ハルトマンに由れば人間の死は自譴の努力の亡滅し破壞するを云ふ、吾人は本能として自ら防衛するの努力を爲し以て大絶對をして善美ならしむるの職に從ふと雖も、其努力は一定の限度上に到達するを得ずして終に亡滅破壞に陷らざるを得ず、死と名くるもの即ちこれなり、換言すれば吾人の生命は絶對が善美に歸復する犧牲として捧げし贄たるなり、畢竟ハルトマンの說は個人としては厭世に傾き世界としては樂天に傾ける包含的二元論たるなり。

以上說きし所を概觀すればヘーゲルを始めショーペンハウエル及びハルトマン皆唯心的の論議を以て根本的原理に到着せんとし、內省的考察をのみ過重して何等の經驗をも依用するとなかりき、然るに一面に於ては科學の發達は進化論の確立と共に滔々として諸他の學界を襲ひ、研究方法に經驗を重んじ、立脚地に事實的證明を依用し、形而下學の發展に連れて歩一歩形而上學的成就に向はんとせり、所謂唯物論の發達これなり。ロマンティクの哲學を支配する概念は觀念なり、而して唯物論は一切皆物質を以て根底とす。十九世紀の中葉は一時唯物論の爲に全獨逸を支配されしやの觀ありき。

物的一元論

近世唯物論の根底とする所は自然科學に由りて得たる論理的歸結を組織して一體系となすに外ならず。觀念と行爲とは唯物論の理論と實際とを組織する基礎なりと號す。唯物論者の主なる者はフォーグト(K. Vogt)、ブュヒネル(L.Büchner)、モレショット(J. Molechott)及びヘッケルなり、ヘッケルに關する哲學上は已に之れを說きしを以つて其中二者を以て之れを代表せしめ、以て唯物論的傾向が唯心論的傾向に反して起ちし狀を示さん。

モレショットは物質不滅說を以て生命循環を說きしものにして、一切

の自然界は常に循環して止むことなく、生命は物質と思想とを伴ふて世界の諸部を循環し、思想は生命をして一層善美の狀態たらしむる爲に意志を生ず、從つて今の生命は縱令死することあるも又他に循環して毫も缺損する所なしと說く。物質不滅則は必然としてプュヒネルが勢力不滅則を生ぜざるべからず、彼曰く一切の世界は物質と力とを以て其全體を成就せられ、一切の自然力精神力は物質に定住す、從つて精神は單なる所生に過ぎず、動物に於ける資料有機的複合體を成す時は、恰かも蒸汽機關の如く一の作用進行を生じ、其統一されしものを名けて精神といひ、思想といひ、而して又靈魂と名く、靈魂は單に物質の所生なりと云ふ。

物質論者が論ずる所は或は靈魂の存在を許し、精神の不滅を許すとするも、其根底として物質不滅、勢力不滅の二則を出でず、畢竟人間個體の存在は其何れに於ても許容せらるべきものに非ず、唯死を以て悲しむべき現象に非ずとするに於ては皆一致せるもの丶如し。（尙ほヘッケルを說ける條下を參照せられんことを要す）

新カント派心的一元論

唯心論的傾向に反して起りたる唯物論は物質的の根本原理を以て宇宙人生に亘れる一切の事象を說明し爲さんとし、物質的一元を以て唯心論に代らしめんと努めしが、其勢極まるに至つて又再たび心的一元論に歸らんとするの傾向を現はしたり、新カント派を以て標榜するランゲ(Alb. Lange) 及び其系統に屬する諸家これなり、即ち吾人は純粹に原質のみを以て生命、第一原理及び死を以て個體の斷滅とするに慊焉たらず、さればとて舊來の一神的ロマンチックの哲學を以ても滿足するを得ず、漸次に一神論は汎神論に、宇宙實在は現象の以外にあらず、現象即實在といふ觀念に向ひ來りしを看取すべし、靈妙なる此宇宙の本體は現象以外に儼存すべきものにあらず、或は之を器械論的に見、或は意情的に觀ずるの差はありと雖ども此點に關しては略一致の傾向を有し來りしなり、即ち物的一元論の傾向は此に至りて心的一元論として物質論の可能を疑がひ反科學の精神に由りて稍ロマンティッの風格に皈せもとするの傾向を示して以て現代に及びぬ。

吾人は今や大葉なる哲學的傾向を概觀し進んで現代に於ける諸家の死生觀を窺はんとす、要するに第十九世紀に於ける哲學界は科學と接觸を生じてこゝに二大潮流の波瀾となり、一昂一低、運動は反動を以て繼ぎ互に復興（レネイサンス）の氣運を待ちて以て自家の見を張らんとす、而して其飯結は終に之を豫想するに由なく混沌として今に及びしなり、從つて一世の心を支配し、充分なる歸趨を與へて死生の問題を解決すると能はず、疑問は終に疑問として現代の吾等が前に置かれたり。さらば吾人と同代の人は抑も如何の解決法をか有する、これ吾人が知らんと欲する所たり。

哲學者の死生觀

ニイチエ

(四) 現代諸家の死生觀

第十九世紀の後半は實證主義唯物論的傾向が哲學界を占め經驗的事實にのみ着眼して毫も其深意を探ぐると能はざりしが、かゝる科學萬能唯物論全盛に反抗して起うし者はフリードリッヒ、ニイチエ(Friedeich Nietsche)が超人論なり、ニイチエは現代の文明が實證經驗にのみ重きを措き、平等的の人間をのみ造り出し其意志纖弱なるを以て善なりとするに慊たらず、由來人間は決して平等的なるものに非ず、寧ろ不平等を以て其本然の性なりとす、古來の歷史は唯平等にして同情ある人類を造りて以て互に肉慾に耽らんと欲するの傾向あり是れ誤れるの甚しきものに非ずや、歷史は凡俗の群を超絕せし英雄偉人によりて造り出さる。蓋し歷史は英雄の歷史にして凡俗のものに非ず、既に過去に於て然り現在豈に是の如からざらんや、人間の目的は畢竟凡俗を超越し自ら歷史を造り出す「超人」たるにあり、超人は不屈不撓剛毅なる意志を有し、勇敢、自信、自重、節制の美德を保つ者に名く、此に至りて初めて人間自然の本能は滿足せらる、豈に世の凡俗に囚はれ自個性を沒却し平凡生活を送りて可ならんや、個性の發揮、絕大意志の顯現即ちこれ人間の目的なり。ニイチエが希望欲求する所は超人にあり、然れども彼が哲學觀が到所に矛盾を含むと同じく一面に於て彼は不完全にして薄志弱行なる人類は絕えず世に輪廻し再三現出するものなるを信じたりき。ツァラトウストラ如是說に曰く、

嗚呼人間は永久に輪廻するものなり、嗚呼微少なる人間は永久に輪廻するものなり、我曾て最も大なる人と最も小なる人の共に裸形にして相互に類似せしを見たりき、最大人も又人間的にして頗る小なり、是れ我が人間に飽きし所以なり、最も小き者の輪廻、これ一切に對して我が飽き果てし所以なり、嗚呼厭ふべき哉、

と彼は人間輪廻が如何なる理由に由りて起るかを說かざりき、然れども彼は人間輪廻復歸を信せざるを得ざりしなり。

ニイチエは唯物論に激して之に反抗せんとして起ちし者なり、一般の氣運は確實なる事象のみを信じて經驗實證以上には何等の解決をも下すを得ざる唯物論に飽けり、ニイチエの起つ又所由あり。ニイチエに次で新理想主義の哲學が勃興する所以又從つて故あるなり。新理想主義はロッツエ、フェヒナー、ヴントの手によりて現代の哲學界を支配せんとす。

新理想派の主義とする所は科學的知識は哲學の基礎にして科學的知識を離れたる哲學は無きなり、換言すれば科學的知識を總括して最高の統一的知識に達するは則ち哲學の任なりとす。ヴント(Wunt)思へらく科學は宇宙の個々的研究に過ぎず哲學は此等部分的知識を總合概括して吾人が知識の達せらるべき範圍に於て最終の統一的知識に達したるものなり、此に至りて一切の科學は其價値を發し眞價を認めらる、而して我等が主觀以外に存する客觀物はカントが說くが如く單に主觀の影像夢幻に類したるものに非ずして這般の現象世界は客觀的實體の顯現なり、此現象の中に幾分なりとも實在の本體を求むることを得べし、さらば其本體とは何ぞや、物か、否、物にも心にも非ざるものか、否、さらば心か、曰く本體は即ち意なり(情、意我本體は複雜なる情緒を有する意の顯現なり)されば我本體に動作する現象も又其本體は複雜なる理知を伴ふ意志ならざるを得ず、然れどもこゝに所謂意志はショーペンハウエルが盲目的意志に非ずして、理智を伴ふ意志なるを忘るべからず、一切の現象界は即ち各々異れる意志の顯現なり。されど之を一切の宇宙現象に移すに當りては唯一最高の意志なるや否やは現時哲學上の結論を以ては之を定むるを

得ず。最高の本體は哲學的には之を定むると稍困難なりと雖も、宗教的信仰を以て之に對すれば宇宙の最高本體は無限の活動を爲し微妙なる働を成就せんとして努力する絶對意志なりと信ずるを得るなり、心靈的本體此に於てか成就す。唯物論者が宗教を以て盲目的なる民衆の情緒とし、何等の尊嚴をも認めざりしに反して新理想派が最高本體の信仰を以て宗教に置きしは蓋し反科學の精神が哲學を刺戟したる影響と云はざるを得ず。從つて死生に對する觀念も、この信仰の上に築かるべき條件なることは言を俟たずして知るを得べきなり。

哲學が科學的唯物論を超絶して別に新らしき理想に向はんとするの傾向を示したると共に、餘りに物質的なる結論に缺陷を感じたる一般の思想は世の怪奇にして科學的研究の及ばざる事象を研究詮明せんとせり、先きにカントが語を引用したる如く、人事萬般の現象は終に哲學をも科學をも近づけず、幻奇なる衣裳を以て世に示されつゝあり、而して世の科學哲學は何等之に關する解決をも下すを得ず、心中の不滿は此等幻奇

なる事象に由りて益々其缺けたるを感じぬ。近時心理的探究會（サイキカルレサーチ）が到る所に起り、神秘的論者（スピチチュアリスト）の勢力を得んとするの現象ある又怪しむに足らざるなり。

心理探究者は吾人の心理的狀態が現象となりて顯現する狀態、世の科學を以て律すべからざるものと信ぜらるゝ原因を吾人の心理に求め、其由て來る所を知らんと欲するものなり。

現代の心理探究者（Psychical Reseacher）として有名なるフレデリック、マイヤース（Frideric Myers）が靈魂及び來世の觀念は科學の探求以上に超絶し然も宗教的信仰以外に他世界の消息を知らんと欲するものなるが、氏思へらく、科學は物質的世界の均一、聯絡、明瞭を以て其信仰となしこの偉大なる假定より實際的發展を爲す、若し事象にして此信仰に悖背する時も尙信仰の誤まれるを認めざるなり、物質世界は二個の信仰に統一せらる、曰く物質不滅則、曰く勢力不滅則これなり、前者は之を可視世界の限界中に認むるを得れども後者に至りては其證を擧ぐること甚だ困難

なり、これ蓋し勢力は獨り物質界にのみ屬する概念に非ざるに由るものにして人間の生命はこの勢力の最も主要なる働きには非ざるか、吾人は生命が何れの所より去來するかを知らず、即ち吾人が知識以上の大なる活動の系統に掩はれつゝわればなり。若しこの生命の根本を探らんと欲すれば吾人は終に不可視世界に迄突入らざるを得ず、吾人をしてこゝに至らしむるは蓋し科學に非ずして何ぞ。

事物の心理的方面を掴む洞觀なく、一種の光明を以て人生の表裏を見ることなからんか、眞理の海の傍に於て其潮音を耳にし、未來の不可思議を知ると終に能はざらむ、可視世界の大なると同じく不可視の世界は又甚だ大なり、この大なる不可視世界は唯吾人の內的省察に由りてのみ見るを得べし。之によりて以て宇宙の大理法の無限なるを暗示せしむ。

トランス幻想

而してこの大理法の不可視世界を見るには幻想に由らざるを得ず、幻想は時として肉體の過程に顯るゝあり、或は病的に顯はれ或は健康體に顯はる、而して其顯はるゝ幻想は已に死せし者の靈なり、過去三十年間余が實驗に現はれしもの實に如是の幻想に非ざるはなし、人類の中心に存する精靈は是に由りて暫らく器官脫離し、自由を愛樂し、未だ肉を有する精靈と已に肉なき精靈とを結合す如是にして一切の智識は進步發展するなりと。

科學者の死生觀

多くの心理探求者が說く所は概ねヴイヤースが說と一致し、小なる點には異る所あれど大體に於ては他世界、個體靈魂の不滅、幽冥界と肉體との交通を稱道して已まず而して其等の探求者は多くは其初めは毫も之を信ぜざりしが實驗を重ぬるに從ひて漸次に之に傾き終には毫も疑ふべき餘地なきを自白しつゝあり、しかも其等の人士は概ね充分の學識を有する者たるは論を俟たざるなり。

ゼームス

一面に於て心理的探求の如き運動が着々として步を進むると共に他面又科學は日進の勢をすてず、心理探求家の死生觀を知ると共に吾人は科學者、特に心理學及び生理的の死生觀をも見ざるべからず。

現今心理學の大家、ウィリアム、ゼームスは死生及び死後をば如何に

か觀じたる曰く「世の生理學者は自己が思想は腦髓の作用に過ぎず」と道破する時之を聞きし世人は不死の希望を破壞せらるゝならんと感ず、自己も又其作用といへるものをば、蒸氣は沸騰の作用、光明は電氣の作用、力は水力の作用と、やらに解釋す、されどかゝる作用は生産的作用なり、生産的作用は生理學者の考ふる如く腦髓と伴はざるべからず。されど心理界に於てはかゝる生産的作用のみが作用の全般に非ず、吾人は又別に自由作用若しくは放釋的作用を有す、風琴の鍵は唯傳達の作用のみ、所好の管に風を送りて震動を爲すにあり、されど空氣は風琴によりて生ずるには非るなり、この理論に由りて余は思想が腦の作用なりといへる法則を思考するに當り、單に生産的作用のみを求めず、他面に於て自由作用、放釋作用あることをも知らざるべからず、生理的心理學者は實にこの一點を看過せり」と。

メチニコフ

されば生理學者は死を以て如何にか見る、吾人は現存の細菌學者メチニコフ (Mechinekoff) を以て之れを代表せしめ以て現代に於ける生理學者中の最も興趣あるものを驗せんか。メチニコフ思へらく、人間の性慾不用の機器本能の矛盾は時として疾病を釀して死亡の原因となる、而して古來之に處するの方法二あり曰く一は宗教にして一は哲學なり、宗教は靈魂の不滅を以て之を救濟し、哲學は汎神論的傾向を以て個人意識が永久の大原理に入り個人的には死滅すべきも一般的原理の不滅なることを以て人を慰籍せんとし、之に名くるに或は觀念、或は意志、エネルギー、力等を以てせり、然れども宗教的の靈魂不滅は今日の科學を以てしては到底之を證明することを得ず、少くとも科學的知識と矛盾す。從つて宗教も哲學も畢竟死の恐怖を慰するに足らざるなり、而して科學の進歩は其歩甚だ遲々たるに似たれども少くとも科學の進歩に依付して現時よりも老衰を遲くし長命を保つを得べし、人間は或限度の長壽を保つ時は自然に死の現象現はる、即ち彼の蜆の一種たるエフェメリッドを見よ、其口僅かに痕跡を止むるのみにして食慾なく從つて何等生活慾を有せざるに似數時間空中に翔りて生殖を行ひ直ちに死滅す、この一例より類推す

自然的死

れば人類も極度に其生命を保つ時は自ら死の本能顯はれ、生活の慾を去つて喜んで死し行くを得べし、人類進歩の目的は一切の疾病と矛盾とを除去し自然的死の現はるゝ迄長命せしむるにあり、而して之に至る唯一の道は科學を措いて他に求むべからずと說けり。されど彼は如何にして此に到着すべきかに至りては唯之を科學の發達に俟つといへるのみ。

上來、節を重ねて說きし所は多く科學哲學の範圍に限られ認識を以て死生の如何を知らんと欲するものに屬す、吾人は現代諸大家の死生觀を窺ふにあたり死生を感じたる文學者は逸すること能はず、而して其代表者としては露國現存の大家トルストイ伯 (Les Tolstoy) を擧げざるを得ず、

トルストイ

杜翁が死生に對する感想は輓近公にしたる彼の書翰に於て窺ふを得べし、杜翁が死生觀は唯一言を以て盡く曰く「一切の地上の生命は夢にして死は眞の覺醒なり」と。

「杜翁思へらく、吾人の生命は一切これ夢なり、即ち地上に於ける生命は一層眞なる生命の夢、其生命は又一層眞なる生命の夢なり、かくて最も眞實なる生命を追求する時は終に神に達す、眞實なる生命は神の生命のみなり。死は現在の夢より醒むるを謂ふなり、死は精神の自由放釋なり、肉體はこの自由の放釋を障礙す、眞實の生命は此障礙の除かれし時初めて發展の途に着かんとす、死は精神の放釋にして自由の恢復なると共に眞生命の曙光こゝに於て初めて其光明を放つと。

現代諸家の死生觀を窺ふて此に至れば、終に何等の解決をも有せざるに似たりと雖ども其中自ら唯物論的傾向より一轉して、精神中の偉力を認め何等かの解決を下さんするの傾向を生じ來れるを看取すべし、吾人は進んで今や死生問題の歸結に急がざるべからず。

第二章　死生問題の歸結

(一)　死生問題の大觀

東洋に於ける二大思想

上來個々の死生觀、時代には時代の色彩あり、國土には國土の音調あり、其の感想を異にすと雖も、退て之を大觀すれば其間亦一條の徑路を看取し得ざるにあらず。顧ふに人類の死生に對する感想は之を二大別して現世的なるものと來世的なるものとに分つを得べきか、其現世的なるものは現代に於ける意義を思索するに急にして深く來世に對する感想を語らず、來世的なるものは來世に於ける幸福を憧憬するに專らにして重きを現世に置かず、一には樂天の色彩ありて他には厭世の音調あり。之れを東洋に見るに支那の思想は前者に屬するものにして印度の思想は寧ろ後者に屬す、同じく印度思想といふと雖も、波羅門教は來世の要求に急にして佛教は現世の生活を棄てず、同じく佛教と雖も、聖道門の諸

宗(所謂三論、法相、華嚴、天台、眞言、禪の類)は現世的に傾きて、淨土門の諸宗(所謂淨土、眞宗等の類)は來世的なり。等しく支那思想と云ふと雖も、荆楚の學派は來世的にして鄒魯の學派は現世的なり、是等の思想を綜合せり我が日本に於ても亦現世的なる儒教、來世的なる佛教とは共に我が在來の神道に影響し、佛教と結びては兩部一實の神道となり、儒教と結びては垂加、烏傳等の新神道となり、東洋五千年の思想史は此二主義の盛衰消長の外、語るべきことなしといふも亦過言にあらざるべし。

- 東洋思想
  - 現世的＝支那思想
    - 現世的＝鄒魯學派(儒教)
    - 來世的＝荆楚學派(道教)
  - 來世的＝印度思想
    - 現世的＝佛教
      - 現世的＝聖道門
      - 來世的＝淨土門
    - 來世的＝波羅門教
      - 現世的＝順世外道の如き
      - 來世的＝苦行派の類

一　死生問題の大觀

顧て西洋思想を見んか、こゝにも亦此二大思想を看取するを得べし、其現世的なるものは希臘の思想にして、其來世的なるものはヘブライの思想たり。希臘思想の道義的論理的たるに對してヘブライの思想は宗教的信仰的なり、前者には樂天の聲ありて後者には厭世の響あり、歐洲三千年の思想史も亦實に此二者の盛衰消長に外ならざるなり。曾て歐洲の天地に覇を唱へし希臘思想、一たびヘブライ思想に征服せられて中古の哲學となり、こゝに二主義の抱擁を見たりと雖も、其軋轢は隱約の間に行はれて、終に文藝復興となりて久しくヘブライ思想の下に屈辱を忍びし希臘思想は勃然として頭を擡げ近世文明の曙光を放ち、朝暾麗かに宇内を照しぬれど、其思想の跡を尋ぬれば、希臘思想に於ても見得べかりし、唯物、唯心の二派は其爭ひを止めず、曾てヘブライ思想と相抱きし唯心派は佛人デカルトによつて疑はれ、英人ベーコンによつて破られたれど、ライプニッツ出るに及びて新裝を凝らして思想界に權威を振はんとし、こゝに經驗を主とする唯物派と、合理を旨とする唯心派との二大

潮流を見しが、曩世の大思索家インマニエル、カント出るに及びて共に此大海に朝宗せしも、カントの後、又二派各〻行く所を異にし唯物を說き經驗を重んずるものは科學萬能の力を振つて我が人生を律せんとし、之に對する合理派は一面に此眞理を是容すると共に他面に於て更に夫以上に立脚の地を置かんとし從來軋轢し來れる此二大思想を調和せんとする新理想派となつて現はれ一浪退きて一波來り、一波一浪、起伏常なく終に現代に及びぬ。

- 西洋思想
  - 現世的＝希臘思想
    - 現世的（唯物的、經驗的）
    - 來世的（唯心的、合理的）
  - 來世的＝ヘブライ思想
    - 現世的（新教）
    - 來世的（舊教）

這般の大觀は素より正確にしか言ひ得べしとするにあらずして比較的に其傾向のある所を辿りしに過ぎざれど、東西兩洋の思想を皆見するに於て吾人は暫く如是に觀察するを以て强ちに不當の言ならざるを信ず。

靈魂の有無

然らば吾人は上來の皆見によりて死生問題に關して何等かの解決を得たるか、曰く未だし。現世的なる思想と雖も、死の問題を閑却して安慰を得べしとするにもあらず、來世的なる思想と雖も、亦死に就て正確の知識を得たるにあらず、死の問題は依然として永久の疑問として吾人の前に横はれり。其先決問題たる靈魂の有無既に決せられたるか、其有無未だ決せられず、何を以てか其歸趣を論せん。

暫く上來縷述する所に考ふるに死を以て一切の終局なり、個性の斷滅なりとするものと、死は一切の終りにあらずして個性も亦存續すと說くものとの二に分つことを得べし。其死を以て一切の終局なり個性の斷滅なりとなすものゝ中にも、一切皆空の主義を取る所のものと、何等かの存續すべきものありとするものとの區別あり、一切皆空といふと雖も、其形骸の死と共に滅ぶるものにあらざるは事實なれば其空といふは寧ろ精神的の或物（サムシング）を指すものにして其形骸を指すにあらざるやもとより論なく其の死後何等か存續すべきものありと許容して尙ほ斷滅を說く所のも

靈魂の形質

のは來世に於ける個性の存續を否定するに外ならじ。其個性存續を說くものゝ中にも、死後の靈魂に形質ありとするものと、形質なしとするものとの區別あり、其形質ありとするものゝ中にも亦現世に於ける形質と異ることなしと思惟せる古代神話並に宗敎的信仰に由るものと、現世の如き形質にあらずして一種エーテル質不可見の細身の存續するなりとせる僧侶哲學並にシャール、ボネー等の細身說あり、其形質なしとするものは個性の存續を否定するものと相似たるが如しと雖も、其異なる迄は單に形質なしと思惟するも尙ほ知覺し得るの作用ありと信じたれば否定論者と其趣を同うせざるや大なり。

- 靈魂
  - 有
    - 形質あり
      - 現世と等しきもの
      - 細身說
    - 形質なきも知覺あり
  - 無
    - 一切皆空
    - 個性的靈魂なし

其無とするものは論なし、既に之を有とす然らば其歸趣は如何、これにも數說あり、魂は天に歸し、魄は地に歸すとする魂魄離散の說あり、死後の再生を說て輪廻斷えずとするものあり、天國若くは地獄に趣くべしとするものあり、肉體は尸解して靈魂は羽化登仙すべしとするものあり。

靈魂の歸趣

- 靈魂の歸趣
  - 魂魄離散說（儒敎の如き）
  - 羽化登仙說（仙家の如き）
  - 輪廻轉生說（印度埃及等の思想）
  - 天國地獄說（基敎回敎の如き）

尙ほ此他にも諸種の分類あるべしと雖も、多くは此四種の變形に過ぎず。吾人は之れによりて其歸趣を得たりとなすべきか、魂魄離散の說は其實個性撥無の說と相距ること遠からず羽化登仙の說は仙家獨得の修行を要するものにして吾人の遽かに到り得べきものにあらず、吾人の靈魂の歸趣として見るべきは輪廻轉生の說と天國地獄の說とあるのみ、しかも此二者其所詮は善者は善處に趣き、惡者は惡處に生るとするものなれば之れ同一と見るも差支なし、蓋し現世に於ける道德律の缺陷は吾人をして公平にして峻嚴なる來世の判斷を待たざるを得ざらしむ、此二者は此缺陷を補はんとする人類自然の要求に出でたるものにして他の輕浮なる感想と自ら其撰を異にす、然らば吾人は之れによりて安心し立命し得べきか、然り吾人は斯く信ずることによりて安心し立命し得ざるにあらず、されど吾人の理性は未だ遽かには之れを首肯するの寬容を有せざるを奈何せん。請ふ吾人をして忌憚なく其所信を語らしめよ。

如何に決すべきか

（二）死に處するの道

近代思潮に無限の權威を有したる科學は經驗の證明によりて肉體以外に精神の獨存を許さず、凡ての心的活動は其要素を感覺の上に置き、感覺は眼、耳、鼻、舌、身の五官と相離るゝを得ず、精神は肉體に影響し、肉體は精神に影響し此二者終に截然として區別すべからずと說く、此科

物質の不滅と勢力の恒存

學の證明によれば吾人は如何にするとも肉體既に腐爛して精神のみ獨存べしとも信ずる能ざるなり、既に精神の獨存を信ずる能はずとせば靈魂不滅の論は科學の勃興によりて其根底を失ひたりと云ふべきか、靈魂不滅の論其根底を失ふ、焉ぞ昇天し墮獄し、轉生し轉廻するを信じ得べき。

然らば吾人は直に科學の膝下に拜跪して死後斷滅一切空無の說に左擁すべきか、曰く否な、科學といへども未だ遽かに死後斷滅一切空無の說を持するものにあらざるなり、其謂ふ所は生前と相同じき個性の存續を否定するものにして生前と異る或物の存在を否定するものにあらず。彼等は物質の不滅を語りて一椀の湯は水となり、水は氷となり、溶解して復び水となり、水蒸氣となり、雨となり雪となるべきも水其者の滅することなきが如く、變化定りなきも其本質に於て生滅なきをいひ、エネルギー恒存を說いて或る時は一漑拭ふが如く細波動かざる止水となり、或る時は直下數千丈素絹を垂るゝが如き瀑布となるも唯だこれ勢力の靜態となり動態となるに過ぎずして其エネルギーに於て增減あるなきをいふ、

生命の不朽

吾人の肉體は一種の物質なり、吾人の精神は又一種のエネルギーなり、彼等も亦其不滅を許さゝるを得じ、吾人は科學の指示する所に從ふも死を以て一切の終局なりと斷ずる能はざるなり。生物學者は更に他の方面より生命の不朽を說て、父は子に子は孫に、孫は曾孫に、曾孫は玄孫に綿々相傳へて終に斷ゆる時なしと、然り、吾人は過去幾億歲、此の如くにして繼承し來り、未來幾億歲、此の如くにして傳ふ、何の時か斷絕すべき、個體の我はこゝに死するも、第二の我第三の我は相繼ぎて出づ、遺傳の理法誤りなしとせば吾人の生命は不斷に相續して其肉體精神共に不朽なるにあらずや、これ吾人の經驗智が確證を擧げて吾人に示せる事實たり、吾人は之れによりて安心して立命し得べきか。吾人の理性は之れを否定するの勇氣なし、吾人の情性は果して之れに滿足し得るか、過去幾千年、凡そ人類の存する所、其思想に淺深冷熱の差ありしと雖も、未だ曾て來世の生活に於て何等かの希望を有せざるなく、吾人の情性は常に死後の或る物を求む、こを唯だ冷やかに物質は不滅なり勢力は恒存

來世の希望

なり、我が生命は子孫に繼承せらるべしとなすのみにて慰めらるべきか、よし理に於ては然か斷ずるを以て正しとするも、情に於ては慊らざるものあるにあらざるか、殊に正しと斷じ得べしとする理の判定も、實は現在の事實を以て未來を推定したるものにして、來世の狀態は經驗の範圍外に屬し、到底吾人の智識に於ては證明すべからざるものなるをや、死は依然永久の疑問として我が前に横はれり。上來縷々數萬言、遍く東西の學說を探りたりと雖も、多岐多端にして適歸する所なく、其解決せらざること五千年前と何の異る所なし。想ふに今後何千歲を經るとも其解決せられざること又今日と異るなけん。死は空論にあらずして人生の事實なり、理論に於て解決せられずとも何かあらん、吾人は去て古人が死に處せる事實に徵して更に考ふる所なかるべからず。試に古人が死に處せる感想を窺はんか、大別左の三に歸結せしむることを得。

永久の疑問

死に處する感想

一　死を以て人生の煩累を脫する樂事なりと思惟する者

二　來世の生活を憧憬する者

三　死生一如と觀ずる者

彼の莊子列子の如く死を以て人生の快事なりと思惟せる非人情的なるものは暫く措き、人情自然の要求に應じては彼の死を以て煩累を脫すと喜べるものも亦來世の生活を憧憬せるものに外ならざれば、之れを第二の中に接すれば古人が死に對する感想は來世の憧憬と死生一如との二に分類するの外なかるべし、而して此死生一如の感想も、死を見る生の如しとなすものなるが故に死を以て一切の終局なりとは思惟せざりしものとも見得べからざるにあらず、かく見得べからざるにあらずと雖も、其實際に當て白刃の下從容として死に就ける蹟に徵せんか、彼等の多くは來世の要求に慰藉を得て、然か爲せるにあらずして現在の境遇、斯く爲すを以て正しと思惟したるが故に斯くなせるに過ぎざれば、死後の問題は須らく之れを個性の自由に放任して各其性格の趣く所に從ひ、こゝに安立の地を得べきにあらざるか、上根上機のものは死生一如の理を觀じて從容自由の心境を開くべく、下根劣機のものは來世の生活を憧憬して

放任せられたる問題

無解決の解決

安慰を其間に得べし、死後の問題は終に解決すべからず、強いて解決すべからざるに解決を與へんとして情を矯め理を枉げて一條の下に律せんとするは、人情自然の要求に背き、理性當然の歸結を否認するものなり。

理と情

に下るの時、自若として能く死に就き得べきか、情に於て滿足したりとき理に於て未だしきものあれば白刃頭上きか、理と情とは離るべからず、吾人は經驗智の重んずべきを知ると共に過去幾千年薫習し來たる情執の人性に於て侮るべからざる力あるものたるを忘るべからず、理は萬人を律し得べきも情は人々其趣を異にす、萬人を律し得べき理を否認するは不當の事に屬すといへども、理性經驗の範圍外に屬する死の問題は其理に背馳せざるの限りに於て人々個々の自由に放任して其信ずる所に從はしめんとす、これ過去幾千年學者の思索し來れる結果を綜合し、古人死生の事蹟に徴して下し得べき吾人當然の歸結にあらずや。

無解決と未解決

信の必要

(三)　人生の本義

人或は云はゞ、汝の歸結は此大問題を以て無解決に葬らんとするものなり、此大問題にして解決せられず如何にして人生問題の根底を定むべきと、然り吾人は之れを無解決に一任し去れり、然れども無解決は未解決にあらず、理を以て解決し得べきものを解決せざるは未解決なるべきも、解決し得べからざるものを解決すべからずといふ、これ一大解決にあらずや、理に於て解決すべからず情に於ては各其好む所に從て其判定を與へよといふ何の不可かあらん、死後の問題は說て決すべきものにあらずして信じて從ふべきものたり、理幽遠に入り論高妙を究むるとも、死生交謝の時に際して氣沮み神悸くは寧ろ古聖先賢の敎示を信賴して其言ふ所に從ひ、こゝに自己安立の地を得て劍戟相交るの中、笑て死に處するものに劣る萬々なるにあらずや。吾人は死後の問題を理に反せざる限りに於て個性の自由に放任せり。これを放任したりと雖も、人生問題

の根底の確立せられざるにあらず、個體靈魂の有無は暫く人々の信ずる所に任するも、人生の不朽なることは科學の認容せる事實にして其形質に於てこそ諸種の論議あれ、死は一切の終局にあらずして物質は不滅に傳へられ、エネルギーは盡くる時なく、生命の核子も亦無窮に持續せらる、過去も此の如く、將來も亦此の如しとせば、人生はこれ過去より未來に達する一路程にあらずや。吾人曾て這般の感想を述べて曰く、

靈魂は斷滅し未來生活の豫想は絶無なりとするも、生命は永久なり以て無限の時間に通ずべし、已に生命は永久にして無限の時間に通ずべしとせば、人生はこれ過去より未來に達する一路程のみ、

いづくをも定めなき世と知りぬれば
家をもたびのこゝちこそすれ

人生猶ほ旅客の如きか夕に宿して朝に出づ、五十年の夢忽ち覺むれば、身は已に他境の客となる、光陰はまことに百代の過客にして、人生は逆旅の如し、營々として働き孜々として務むるもの、これ豈に此の旅

亭に拂ふの宿料なるなからむや。人を以て生きむが爲めに活動するとするは其意解すべからず、人は生きむが爲めに働いて、日々死に近づく、生を目的とすべきか、死を目的とすべきか、吾人は寧ろ云はむと す。生きんが爲めに活動するにあらずして、働くが爲めに生くるなりと、働くが爲めに生く、言頗る奇矯に類せりと雖、これ人生の眞義にあらざるか、生れてこゝに五十年、何の爲すなくして死せんか、これ人生てふ旅亭に宿料を拂はざるもの、眞にこれ無錢飲食の徒なり、吾人は生きむが爲めに働かずして働かむが爲めに生く、見よ吾人の祖先は天地の化育を助けて、此社會を發達せしめ、其生活を利便ならしめ、其作業を巧妙ならしめて以て今日に遺せり、吾人は更らに此社會を進歩せしめ、其生活其作業を層一層圓滿ならしめて子孫に傳ふべきの責あるものにあらずや。宇宙は眞善美に向て進みぬ、我が社會をしてこれに近づかしめんとするこれ人生の職務なり、吾人はこれを目的として倦むなく怠るなく、百折屈せず、千挫撓まず進むべきに向て進まざ

るべからず、進むべきに向つて進む、進み進みて其の爲めに斃る、また何の悲むべきかあらむ、活動するが爲めに生く其活動の爲めに斃るゝは當然のみ昔の道に志すものは皆な此の如くにして死に安んじぬ。宿料已に拂ひぬ、何の時に出發するも可ならざらむ、楠正成は云はず

社會的生命

や「今生の事畢んぬ」と、大石良雄は「思ひは晴るゝ身は死ぬる心にかゝる浮雲もなし」と彼等は此の如くにして從容自若なることを得たりしなり。吾人はこゝに人生の本務を認め、守るべき道德を得るにあらずや。物質は不滅なり、勢力は恒存なりと聽く、吾人の一擧一動豈に吾人の死と共に絕滅するものならんや、佛敎に業相續の說あり、吾人が身、口、意に於て作業する所毫も滅絕することなく、能く三世に繼續すと、說く不可見の來世は今ま云はず、これを社會的に觀察するも吾人の言動は唯だ吾人の言動をして止らず一波動いて萬波之れに應じ、其感化は永久に印せらるゝにあらずや、楠公逝いて已に五百年、しかも其忠魂義魄は今尙ほ吾人に偉大の感化を與へ、クリスト肉に死して二千年、今尙ほ靈に生く

宇宙は一大白紙

ること在すが如きもの之れ社會的生命の不朽を示せるにあらずや、顧ふに宇宙は一大白紙にして人の此世に於ける言動は此白紙に捺したる印影に異ならず、印材たる此身は五十年の命、七十は古來稀れにして破壞し去るべきも、其捺したる印影は千古萬古終に消ゆるの時なきなり、吾人の一言一行にして終に消ゆる時なきを想ふ、誰が肅然として襟を正さゞるものあらむ、吾人は現在に於て其盡くすべきを盡くす、死後の問題抑も何の顧慮する所ぞ、天國ありといふ、これ盡くすべきを盡くせるもの の趣く所にあらずや、地獄ありといふ、これ盡くすべきを盡くせるもの の趣く所にあらず、吾、我が道を行ふて俯仰天地に耻ぢず、來世有ならば幸なり、無なるも亦不可なし、昔は人あり、關山慧玄禪師に問ふ、生死事大、請ふ示敎を垂れよと、禪師一喝して曰く、我が這裡生死なしと、我が這裡生死なきに至て初めて安心立命し得べきにあらずや、

(四)　死生に關する諸問題

死を求む

我が這裡生死なし、唯だ道とする所を行ふて從容自若たらむ、何を好むで生を貪らん、又何を好むで死を求めむ。彼の義を棄てゝ生を取り、道を離れて死を免れんとするは大丈夫の恥る所なりといへども、亦唯だ目前の苦痛に耐ゆる能はずして自ら死せんことを欲するものゝ如きは人生の本義を無視するものと云はざるを得ず、社會は共同生活なり、自ら其職責を盡くさずして擅に死せんとするはこれ人生の旅亭に宿泊料を拂はずして出立せんとする無錢飲食の徒のみ、世の自殺者を見るに、其多くは現在の苦境を脱せんとする利己主義に出でざるはなし、死は人の好む所にあらず、其好まざる所に從はんとす心裏の煩悶苦惱、洞察すべきものありと雖も、進んで社會と奮鬪するの勇なく、道を行ふの心に鋭く、自ら殺して獨り安慰の地を得んとし爲に他を害し人を毒するに至ては其不義不德實に甚しきものあり、吾人は此見解によりて絶對に自殺を否認す、或は云はむ身體病弱、生きて世を益する能はず、寧ろ死するに如かざるにあらずやと、嗚呼何ぞ思はざるの甚しき、生きて世を益する能はざるの故を以て死して世を毒するの要あるか、人は模倣の性に富む、一人の自殺豈に模倣の人を出さずして止まんや、殊に其親戚故舊を苦むるに於て他の豫想し能はざるものあるをや、自殺にして若し許すべき時あらば、是は其死や世を益し人を利するの時にあり、吉田松陰いふ、死して益あらば何時にても死すべく、生きて爲すあらば何時にても生くべしと、死生自ら道あり、之れを誤らずして初めて人生の本務を全うすべし。

自殺の害

自殺既に不可なり、男女痴情の果たる情死の不可なるや論なし。彼等の自ら好まざる死を敢てするに至れる蚤縁を査究したらんには同情すべき點少からず、

情死

彼の岸の玉の臺に乘りかへて佛の姿に身をなし、衆生濟度かなるならば、流の人の此後は絶えて心中せぬように守りたいぞと及びなき願も世上の世迷言、思ひやられて哀れなり（天網島）

とある如く死を欲せるにあらず、しかも其死に就くもの浮世の義理に迫られたる目前の苦痛を免れんとするものにして、人生の本義に背き社會

死刑

の風教を害すること大なりといへども、情死者相互の心情に至ては又一點の掬すべき美點なきにあらず、西澤李叟いふ、

大道を悟りて眞に仁義の眼を開かば、何ぞかゝる不正の死を快とせん、然るに大道を明めずして只私情の向ふ處に切なるもの、天理を私慾に昏まし仁義を名利に害ずるに到る事、實に過ぎて實を失ひ、正を欲して正に背き、眞を邪路に守ること、憐むに堪へたり、これを識る人は己が色に溺れざるを賢しと思ふべけれども、其薄弱より忠孝の道も文武の藝も到る處、需むることあるべからず、云へば云はるゝこと人を譏り、己が不實を顯すこと職を知らぬに似たり。

と、掬すべき美點ありといへども、其守る所の邪路にして其行ふ所の非理なるや言を待たず。

人を殺すの不可なるは何人も之れを熟知し、自ら殺すの不可なること上述の如し、然れども此に公然の殺人あり。戰爭並に刑罰なり、刑罰に於て人を殺す、もと人を殺すを目的とせずして社會の害毒を除くを旨とす、既に社會の害毒を除くを旨とす、犯罪者をして再び罪を犯さいらしむれば足る、無期徒刑あり、終身其自由を奪ふ、何ぞ殊更に死に處するの要あらむ、吾人は今日の死刑制度を以て野蠻の遺風未だ全く脫離せざる目今の社會狀態に於て、よし止むなきの必要あるべしといへども、人生の眞義としては他に代ふるの刑罰を査究して早く此の如き蠻風を撤去すべきの必要を絕叫せざるを得ず、若し夫れ戰爭に至ては、こも亦た文明の進運に伴ひて輸贏を樽俎に決し勝敗を談笑の中に盡するの策を講じて、そが減少を計らざるを得ずといへども、目下の狀態遽かに之れなきを期し能はざれば、人類生存の本務を全うするが爲めに事を干戈に決するの止むなきに至るとも、吾人は明敎大師の所謂兵は刑なり、仁に發して義を主とす、仁を以て亂を悶み義を以て暴を止むるが故に、相正して相亂れず、亂を悶むが故に生を圖りて殺を圖らず、是の故に義征舉りて天下懷かずといふことなく、正刑行はれて天下順はずといふことなしの意を體せざるを得ず、蓋し戰爭と刑罰とは現代の狀勢止むなきの施設に

戰爭

して人類永久の理想にあらず。

吾人は人類生存の本義に基きて一切の自他殺傷の行爲を否認し、人々個々其盡くすべきを盡くし、守るべきを守り、正を蹈むで懼るゝなく人生の本務を完うせんことを望む、既に人生の木務を完うす、死後の問題の如き又顧慮するを要せざるなり。

論じて此に至る、尙ほ一個の忘れられたる問題あり、曰く葬祭の問題之れなり。既に個體の存續を否定す、葬ふに靈なく、祭るに來り饗くるものなし。何が故にか葬し何が故にか祭せんと、これ吾人が個性の自由に一任したる感情の問題を以て理性の判斷を加へんとするものなり、何人か父母死し葬らず、死は斷滅なりとして放擲し得べき、何人か夫兄の靈なしとして其祭禮を斷つべき、これを葬ふは情なり之れを祭るも亦情なり、人に此情ありて人生初めて春風駘蕩たるべし、聞く唯物を旨とし經驗を事とせるオーギュスト、コントも妻の死に當りては展墓怠るなく以て追想の料としたりと、父母死して尙ほ在(います)が如く、夫兄逝きて尙ほ存するが如くに奉事するは人情の自然にして子たり孫たり弟たり妻たるものゝ至情將に斯くあるべきのことに屬す、情を矯めざる我が死生觀は此種の儀式を輕視して人生の趣味を滅却せんとするものにあらず、我が死生觀が諸種の問題に對する感想概ね此の如し。之れを未だ解決せられずといふものは、理を枉げ情を矯め、强て一條を以て他を律せんとするものにして、未だ穩健中正に人生を看取するものと云ふべからず。

大死生觀了

大死生觀索引

ア

アウストリヤ神話……七
アメンチ（隱處）……一七
アールの樂園……一八
アピス（牡牛）……一八
アッシリア……二三
アッカデアの宗教……二三
アンナ……二三
アヌ……二四
アダム……二八
アエスタ經典……二四
アフラ、マヅダ（善神）……二四
アングラ、マニユー（惡神）……二四
アポルローン……二九
アルテミス……二九
アフロヂテー……二九
アレス……二九
アムプロジヤ……四一
アペルタ……四七
アイスランド……四九
アスガルト……五一
アナキシマンドロス……五六
アナキシメネス……五七
アナキサゴラス……五九
アガトーン（善）……六四
アリストテレースの死生觀……八八
アパテイア（不動心）（ストア派）……九四
アレキサンデル大帝……一〇六
アウグステイーヌス……一三

アウグステイーヌスの罪惡觀……一三三
アラビヤの宗教……一六三
アルラー神……一六七
アブベクル……一六九
アダム・エヴ（失樂園）……二三四
アタルバ、ヴェダ……七二二
阿修羅（六道）……二〇〇
阿輪迦王……二〇六
馬鳴菩薩……二〇八
阿賴耶……二一二
アクバル大帝……二一〇

イ、井

インス……一七
イスタール……二五
イスラエル……二八
イシオル……四一
「イリヤッド」……四三
暗殺論（栢朱）……三四八
荒魂……四七二
甘糟忠綱……五〇三
足利尊氏の參禪……五一八
朝倉義景……五二四
赤穗義士の死生觀……五三四
赤穗義士と素行……五四二
赤穗義士の辭世……五四四
兩森芳洲の自然論……五四八
新井白石……五五一
イデア論（プラトーン）……七六
インフルェノ（地獄界）……一四三
インノセント三世……一五二
印度古代の死生觀……二七二
印度古代死後の觀念……二七四
因明論派……二八〇
印度教概觀……三一六
印度の葬儀……三二三
「衣帶中贊」（文天祥）……四三三
倭冠……四五九
一遍……五〇二

ウ

ウル（虛空）……二四
ウラノス……四〇
宇宙の靈（プラトーン）……七六
運命の鍵（同上）……八五
ウジア（實體）論（アリストテレース）……八九
ウイクリッフ……一七二
ヴォルムス會議……一九二
ウルクエル（源泉）（ファウスト）……二四六
ヴェタ（韋陀）……二七二
ウパニシャッド……二七五
韋陀派……二八〇
石田三成……五二五
隱元……五三三
伊藤仁齋の相續不斷論……五四九
「一代女」（西鶴）……五八〇
一旅亭……六六四
勝論派……二八〇
有細分……二八三
毘多輸迦太子說話……三〇六
ヴイシユヌ派……三一九
上杉謙信と益翁宗謙……五一九
宇津木矩之丞……五六二
宇宙開闢說……六〇五
宇宙觀の變遷……六〇七
ヴント……六四一
宇宙は一大白紙……六六七

エ、エ

エア……二三
エホバ……二八
エヴ……二八
エスペレド(アエスタ)……三四
エンヂダット(アエスタ)……三四
エピメートイス……四二
エリユシオン……四三
エリンナイス……四四
エピテル神……四七
エピダウロス……四八
エッダ……五〇
エルフイドニル……五二
エレア派……五八
エムペトクレス……五九
エル千年の旅(プラトーン)……八三
エピクロス學派の死生觀……九三
エピクテタス……九九
エピクロス……九九
エパミノンダス……一〇五
エツセル……一八〇
英雄(泰西)の死生觀……二〇五
エルト、ガイスト(地精)……二四七
淮南子……三五九
慈遠……三七四
慈遠(廬山)……三七九
會通本末(「原人論」)……三九五
惠心僧都……四八二
榮西……五〇六
永久の疑問……六六〇

オ、ヲ、ワウ

オヂプウエイ……八
オシリス……一七
オリュンポス……四〇
オルフオイス……四四
オイリュヂゲ……四四
オプチマス、マキシマス(至上神)……四七
オーヂン……五一
オスカニ……一六四
王陽明の死生觀……四五三
王朝に於ける死生觀……四九
「往生要集」(惠心)……四八二
王朝時代の武士……四八四
王朝文學に現はれし死生觀……四八五
大内義隆の臨終……五二一
大石義雄……五四一
小野寺十内の辭世……五四五
荻生徂徠の天命論……五五一
荻生徂徠の臨終……五五一
大鹽中齋……五五六
大鹽中齋の死生觀……五五八

カ、クワ

カー(自我)……一八
カルデヤ……二三
ガータ(アエスタ)……二四
ガロー、デマーナ(樂園)……三七
カーカ(最終審判)……四〇
ガイア……一六四
カアバ宮殿……一九四
學界革新家の死生觀……二〇一
ガリレオ、ガリレイ……九、二六五
カント……二六八
カントの來世、死生觀……二八三
迦毘羅(カピラ)……

羯磨……二九〇
餓鬼界（六道）……二九七
迦膩色迦王……三〇七
「懐沙賦」（屈原）……三五三
韓嬰……三六一
漢武帝……三六一
韓退之……四〇五
顔杲卿……四一七
顔真卿……四一八
岳飛……四二〇
顔伯瑋……四三
柿本人麿……四七七
「菅家文章」（道真）……四九五
鎌倉武士の死生觀……五〇五

キ

希臘神話……三八
キュクロープ……四〇
鎌倉武士と禪……五〇八
關山國師……五一六
蒲生氏郷……五二四
烏丸光廣の臨終……五三四
貝賀彌左衛門の辭世……五四五
貝原益軒の人生靈魂論……五四九
科學の發達と死生觀の變遷……六〇三
科學の發達……六〇三
科學の哲學的成就……六三四
科學者の死生觀……六四五
加茂真淵……五六七
冥府（黄泉）……五七一
烏傳神道……五七二
ギイオル……五二
希臘武士の死生觀……一〇一—一一〇
基督の死生觀……二一—二七
キベリーネ（王權）……一五二
騎士道の發達……一五三
鬼崇（古代支那）……三二七
「漁夫辭」（屈原）……三五三
鬼神論（朱子）……四二三

ク

クロノス……四〇
クセノフオーン……五七—六七
クリシポス……九四
グレゴリオ七世……一五一
グエルフ（法王權）……一五二
クロンウエル最後……二〇五
グレーチヒエン悲劇……二四八
屈原……三五二
近代偉人（支那）の死生觀……四五八
木村岡右衛門の辭世……五四五
木下順庵……五四七
木戸孝允……六〇二
器官不用論（ラマルク）……六一二
キユビユ……六一三
空也上人……四八二
熊谷直實……五〇四
公卿と禪……五〇九
楠正成……五一二
楠正成と明極楚俊……五一三
熊澤蕃山……五五一
黒住宗忠……五七一

ケ

ヴレス……四七
ケトー……一〇八
教父哲學……一三一
ゲーテ……一四〇
ゲートと進化論……一四一
ゲーテの自殺論……一四三
啓蒙(哲學)時代……一六三
原始佛教の死生觀……一九六
荆軻……三五一

コ

コエバイ……七
コペルニカス……九
コーラン經……一六八
コペルニカス……一九五
業種子……二二一
五行……三二六
孔子……三三九
孔子の死生觀……三三〇
谷神不死(老子)……三三七
五行の盛行……三五八
黄泉國……四七二
古今和歌集……四八六
古生物學……六〇八
根本意志……六三一

原人論……二八一
「原道」(韓愈)……四〇六
「原鬼」(韓愈)……四〇七
元朝と喇嘛教……四三九
「源氏物語」……四八九
「源氏物語」に現はれし物の怪……四九〇
源平時代の死生觀……四九九
月照……五九八
現代諸家の死生觀……六三八

サ

サン(日神)……二四
サツルナス……四六
サイア……四六
サボナロラ……一八一
「サーマ、ヴェダ」……二七一
數論派……二九六
細身轉生……二八五
細意識……二九六
三界……三〇〇
三禪天……三〇一
三神(印度教)……三一七
「采薇歌」(伯夷叔齊)……三五〇
三國時代の死生觀……三六三
祭祀論(朱子)……四一三
「西遊記」……四四〇
西行……五〇五
佐久間盛政……五一三
佐藤一齋……五五五
西鶴……五七九
西鶴の辭世……五八一
佐久間象山と吉田松陰……五九〇
西郷南洲……六〇〇

シ

シエリング……九
ショーペンハウエル……九
死者の裁判……一八
死人の書……二一
シン(月神)……二四
主の日……二八
シエオル(來世)……二八
死の箭……三六

シンバト、ベレッシ（計算の橋）……三七
シルワナス……四六
ジオゲネス……六一
生滅論（アリストテレース）……九〇
シーザー……一〇八
シセロ……一一〇
使徒の死生觀……一一七
初代基督敎……一一七
新プラトーン派……一三〇
淨罪界の思想……一三六
淨罪界（ダンテ）……一四五
十字軍……一五七
宗敎改革者の死生觀……一七一
ジエローム……一八〇
宗敎改革（ルーテル）……一九〇
ジオルダノ、ブルノ……一九七
シエクスピーヤ……二三三
ジユリエットの死……二三七
シエークスピヤの絶句……二三八
失樂園……二三二
純粹理性批判（カント）……二六六
實踐理性批判（同上）……二六六
四性（印度）……二七七
順世外道……二七九
ジヤイミン……二八一
勝論派の六句義……二八一
釋迦牟尼の死生觀……二八六
釋迦の出家修道……二八八
諸行無常……二八九
諸法無我……二九〇
四諦十二因緣……二九〇
死後の識……二九一
釋迦牟尼の入涅槃……二九三
十二因緣……二九八
色界（三界）……三〇〇
初禪天……三〇一

四禪天……三〇一
諸法皆空論……三一三
眞如緣起論……三一四
禪那敎……三一六
若提子（ジユアカンラ）……三一七
シバ神（死神）……三一八
シバ派……三一八
支那古代の死生觀……三二三
四象……三二五
儒敎の死生觀……三二八
荀子……三二四
指薪の喩（莊子）……三四二
春秋諸家の死生觀……三四四
支那中古に於ける死生觀……三五七
秦漢に於ける死生觀……三五七
秦の始皇帝……三五七
諸葛孔明……三六四
七賢人……三六六
尸解……三六九
支那佛敎徒の死生觀……三七二
「自覺」（白樂天）……四一〇
周子……四一七
朱子……四二三
心性不滅論（朱子）……四二四
謝枋得……四三四
支那近代に於ける死生觀……四三六
成吉斯汗（ジンギスカン）の事業……四三六
成吉斯汗（ジンギスカン）の遺誡……四三七
壬叔吏……四五二
聖德太子……四七四
親鸞……五〇一
「死の歌」（白隱）……五三一
死節論（素行）……五四一
儒家（德川時代）の死生觀……五四六
情死（近松）……五七七
神道の死生觀……五六四

神道の發達……五六四
市井遊俠の死生觀……五八五
十返舍一九の辭世……五八九
蜀山人の辭世……五九一
「士規七則」……五九三
死の感想（松陰）……六〇八
宗教と科學との衝突……六〇四
ショーペンハウエルの意志說……六三〇
新カント派の哲學……六三七
心的一元論……六三七
新理想派の哲學……六四〇
進化論の死生觀……六一一
自然淘汰論……六一四
人猿同祖論……六一五

ス

スピノザ……九
スカンデナビヤ神話……四九
スペンサー……六二三
心理探究家の死生觀……六四三
死生問題の解決……六五〇
死に處する感想……六六〇
信の必要……六六三
人世は一旅亭……六六四
人生の眞義……六六五
社本的生命……六六六
死を求ひ……六六八
自殺の害……六六八
情死……六六九
死刑……六七〇
ストア學派の死生觀……九三—一〇〇
スパルタ武士道……一〇一
スコラ哲學……一三四
スタウビッツ……一八八
スカラ、サンタの階段……一九〇
スピノザ……二五五
數論の二十五諦……二八三

セ

セット……一七
セゲチア……四六
日耳曼族……四九
生物論（アリストテレース）……九一
セネカ……九五
セント、ヘレナのナポレオン……二一三
生死輪廻……二七七
聲論外道……二八〇
小乘有部の死生觀……二九六
世親菩薩……三一〇
生と義（孟子）……三三四
「出師表」（諸葛孔明）……三六五
宗密……三八一
「水滸傳」……四二一
菅原道眞……四九五
鈴本正三……五一七
「招魂賦」（宋玉）……三五四
「精神訓」（淮南子）……三五九
善導……三七九
斥迷執（原人論）……三八一
斥偏淺（原人論）……三八六
邵東節……四一五
「正氣歌」（文天祥）……四三三
「西廂記」……四四一
「絕命辭」（方孝孺）……四五一
禪と鎌倉武士……五〇八
禪と公卿……五〇九

戰國武士の死生觀……五一九
石平道人……五二七
垂加神道……五六六
生命源始論……六一七
生命源始論（ヘッケル）……六一八
勢力恒存論……六二四

ソ

ソロモン島……七
ソフイスト……六二
ソークラテースの死生觀……六三—七四
莊子……三四〇
莊子の死生觀……三四一
宋玉……三五四
僧肇……三七七
蘇東坡……四一一

タ

ゼームスの死及死後論……六四五
西洋の二大思想……六五一
西洋の死生觀……六五三
生命の不朽……六五九
戰爭……六七一
宋儒の死生觀……四一五
俗文學（支那）に現はれし死生觀……四四〇
宋江……四四一
曾鳳韶……四五二
曾國藩……四六四
俗間文學の死生觀……五一四
葬祭問題……六七一
ダーウイン……九、六一四
タルタロス……四〇
ターレス……五六
ダリアス……一〇三
ダンテ、アリギエリの「神曲」……一三七
提婆菩薩……三〇九
「大乘起信論」の眞如緣起……三一四
達磨……三七八
達磨に關する傳說……三七八
「太極圖說」（周子）……四一七
託生有無論（朱子）……四三五
高天原……四七二
田村將軍……四七九
高丘親王の入竺……四八一
平重盛……五〇三
平忠度……五〇三
平重衡……五〇四
武田信玄と快川紹喜……五一〇
高橋紹運……五一三
澤庵と柳生宗矩……五一九
竹林唯七の辭世……五四五
「靈の眞柱」（篤胤）……五六九
魂と骸（篤胤）……五六九

チ

チタン……四〇
中世哲學の死生觀……一三九—一三七
地獄界（ダンテ）……一四三
地獄界（六道）……二九九
畜生界……二九九
長生法（抱朴子）……三六八
直顯眞源（原人論）……三九三
張橫渠……四一八

知行合一……四五七
「沈痾自哀文」(憶良)……四七五

ツ

ツム……一七
ツイク……二四
ツイカラ……二四
ヅーシ……二五
ヅエンド、アエスタ……三三
ツアラツーストラ……三四
ツオイス……三八
ツチリア……四八
ヅニノーン……九四
通幻と細川頼之……五一九
近松門左衛門の戯曲……五七五
近松の辭世……五七八

テ

テオゴニエ(神統記)……四四
テルミナス……四八
デウス、フイヂアス……四七
デモクリトス……六〇
デミウルゴス(造化主)……七八
デヒナ、コンメヂア(神曲)……一三七
天堂界……一四七
「天路歴程」……二三九
デカルト……二五三
天上界(六道)……三〇一
提婆菩薩……三〇九
轉生の思想(支那)……三七一
程明道……四一九
程伊川……四二〇
鄭成効……四五九
鄭芝龍……四六〇
鄭成効の憤死……四六二
丁汝昌……四六七
丁汝昌自殺……四七〇

ト

動物崇拜……一八
ト、アバイロン……五六
等閑の河(プラトーン)……八七
動物生氣(デカルト)……二五四
道教の死生觀……三三六
濁醪の喩(少壯子)……三四三
陶淵明……三七〇
曇諦前生譚……三七三
曇鸞……三七九
兜率上生……三八〇
唐宋文人の死生觀……三九七
杜子美……四〇一
唐宋志士の死生觀……四二七
道元……五〇六
豐臣秀吉の辭世……五二四
德川武士道の死生觀……五二六
德川家康と淨土宗……五二六
宮森助右衛門の辭世……五四五
「鳥部山」(近松)……五七五
トルストイの死生觀……六四八
東洋に於ける二思想……六五〇
東洋の死生觀……六五一

ナ

ナポレオン……二〇一
ナポレオンの宗教……二一三
ナポレオンの終焉……二一五
ナチケタス神話……二七五
龍樹菩薩（ナガージュナ）……三〇九
ナーナク（シク派教祖）……三一〇

ニ

ニングフース……七
ニユージーランド……七
ニコムフエー……三九
ニツフレ……五二
ニカイヤ教監會議（ニケーヤ）……一三二
因明論派……二八〇
人間界（六道）……三〇〇
二禪天……三〇一
諸冊二尊……四七一
鍋冠日親……五一二
南北朝武士の死生觀……五一三
中江藤樹の生死無差別論……五五〇
楠公七生説（松陰）……五九五
二程子の説……四一九
日本甲螺……四五九
「日課四條」（曾國藩）……四六四
日本上古に於ける死生觀……四七一
日本上古の思想……四七一
和魂……四七三
日本上代の葬儀……四七三
日本中古の死生觀……四九九

日蓮……五一〇
日蓮の人格……五一一
日蓮宗義……五一二
日親……五一三
新田義貞の遺戒……五一六

ヌ

ヌウス（理性）論（アリストテレース）……九一

ネ

ネクタル……四一
ネロの迫害……一二三
ネオ、プラトニスト……一三〇
日本近世の死生觀……五二六
涅槃説（ショーペンハウエル）（コルワナ）……六三二
ニイチエの哲學……六三八
ニイチエの輪廻説……六三九
人間論……六〇九
ネストリアン派……一六五
ネルソン……二一七
涅槃説（ショーペンハウエル）……六三二

ノ

ノドツス……四六

ハ

パチウアン……八
パフ……二四
ハメトスタカーンス……三七
ハデス……四〇
パンドーラ……四二
バルメニデース……五七
パウロ……一一九
パッカタ(七罪)……一四六
パラヂソ(天堂界)……一四〇
ハーヂー……三一
「ハムレット」……三五
「パラダイス、ロスト」(失樂園)……三三
バンヤン……三六
バンジャップ(五河地方)……一七二
バーダラーヤナ……二八一

ヒ

ピタゴラス……六一
「ピルグリムス、プロクレス」(天路歴程)……二三九
ヒポクラテス……二〇三
八正道……二〇三
八不中道論……二一三
八卦……二二三
盤古氏の天地剖判……二二四
伯夷叔齊の死生觀……二五〇
白樂天……四〇八
白隱……五二一
「配所殘筆」(素行)……五三五
原惣右衛門の辭世……五四五
林羅山の死生觀……五四七
芭蕉……五八一
芭蕉の終焉……五九三
馬琴……五九七
ハルトマン……六二三
ハルトマンの無意識說……六二三
ヒユーム……二六三
「琵琶記」……四四五
人魂……四九四
病中の用心(白隱)……五二三
平田篤胤……五五七

フ

フインランド……八
プロメートイス……四一
ファアルハラ宮殿……五一
フエンリス……五七
プノイマ……六二
プロダゴラス……六八
「ファイドーン」梗槪……七五
プラトーンの死生觀……一三六
プルガトリオ(淨罪界)の思想……一四五
プルガトリオ(淨罪界)……一六三
回々教の死生觀……一七五
フツス……一八〇
プツペル……一九八
プルノの學說……二一
文棄(泰西)の死生觀……二四
「ファウスト」……二四七
「プロローク、イム、ヒンメル」(天上序曲)……二七〇
フイヒテ……二七六
ブラーマン(梵)……二七六
佛教に於ける死生觀の變遷……二〇六
富那夜奢(プニヤーヤシス)……二〇八
梵教會(ブラフマ、サマジ)……二二
腐骨の喩(栢朱)……二四五
佛道二教の衝突……二七五
佛道二教の融和……二七六
文天祥……四二

武士道の萠芽……四七三
文學(王朝)に現はれし死生觀……四八五
「不動智神妙錄」(澤庵)……五二九
不死の理(松陰)……五九四

ヘ

ヘーゲル……九
ヘルメロタハ……二四
波斯神話……三八
ヘスチア……三八
ヘカトンハイル……四〇
ヘシオドス……七、四一
ヘルクレス……四八
ヘラ……五一
ヘラ(地獄)……五二
ヘルモド……五三

ホ

ヘラクライトース……五八
ペテロの死……二四
ペツレヘム教會……一七
「ヘレナの曲」……二四九
ベーコン……二五九
ヘーゲルの哲學……六二六
ヘーゲルの左右兩黨……六二八
ヘルヴオルン……六二
ヘツケル(生命源始論)……六二八
ヘツケル(死論)……六三
物的一元論……六三五
物質恒存論……六三四
文學者の死生觀……六四八

ポープ……四
ホロス……二七
ポサイドーン……三九
ホメーロス……四〇
ホメーロスの死の觀念……四三
北歐神話……四八
忘却の野(プラトーン)……八七
封建時代の死生觀……一五〇
法王權……一五二
封建武士の氣風……一五五
ポツプス……二六〇
ポネーの細身說……二六四

マ

マウク神……七
マクス、ミユラー……五四
マーカス、アウレリウス……九七
末日審判(キリスト)……一一六
梵……二一六
梵教會……三二
抱朴子……三六七
飽覩前生譚……三七三
菩提遠磨……三七八
方孝孺……四五〇
法然……四九九
北條氏政の最後……五二一
「反古集」(石平道人)……五二八
ホモデイ(人間論)……六〇九
放任せられたる問題……六六一
マホメツト……一六五
マルチン、ルーテル……一八三
「マヌ法典」……二七
末那……三二

マイヤースの幻想論（トランス）……六四四

ミ

ミトガルト……五一
ミレトース學派……五六
ミルトン（ミーマンサ）……二三九
彌曼沙派……二八〇
源頼朝……五〇七
源實朝……五〇八
三原照心……五一三
三浦梅園……五五四
水野十郎左衛門の辭世……五八六

ム

ムルグ……二三
無細分……二八三
無色界（三界）……三〇〇
無我と輪廻……三〇四
無著菩薩……三一〇
室鳩巣……五四八
無意識說（ハルトマン）……六三三
無解決の解決……六六二
無解決と未解決……六六三

メ

メムフイス神殿……一八
メフイストフエレス（「ファウスト」）……二四八
メチニコフ……六四六
メチニコフの自然的死論……六四七

馬鳴菩薩……三〇八
名言種子……六四六

モ

孟子……三三〇
孟子が安立之地……三三三
毛利元就と眞宗……五二二
本居宣長……五六七

ヤ

ヤーマ（閻魔を見よ）……七
約束の國……二八
ヤーエー……二八
ヤスナ（アヴエスタ經典）……二四
「ヤジユール、ヴェダ」……二七二
ヤマ（死神）（焰摩、夜摩）……二七三
楊朱……二四五
楊朱の現世主義……二四六
耶律楚材……四三八
陽明の自得……四五九
山中幸盛……五二三
山鹿素行……五二四
山鹿素行の修養……五三五
山鹿素行の遺書……五三八
山鹿素行と隱元……五三九
安井息軒……五五四

瑜珈派……二八〇
「夕顔」の物の怪……四九〇

ヨ

ヨハン、ファウスト博士……二四七
瑜伽珈派……二八〇
欲界(三界)……三〇〇
黄泉國……四七二
横川勘平の辭世……五四五

ラ

ランゲ(アンドロー)……七
ラー……一六
ラグマレリ……五三
ライカルガス……一〇一
ライプニッツ……九、二六一
賴耶緣起論……三一一

リ

遊俠の死生觀……
吉田忠左衛門の辭世……五四五
吉川惟足の理說……五六五
吉田松陰の死生觀……五八九
吉田松陰の辭世……五九七
ラーマーヌジャ派……三一九
ラーム、マフン、ロイの梵教會……三二一
ラマルク……六一二
ライエル……六一三
來世の希望……六五九

リムファ……四六
リベラ……四七
リベル……四七
ヴオダン……
「リグ、ヴエダ」(理具韋陀)……一七二
輪廻の絶園(印度)……二七八
龍樹菩薩……三〇八
六朝時代の死生觀……三六三
李太白……三九八
輪廻論反駁(二程子)……四二
陸象山……四二五
輪廻生死の迷信(王朝)……四八〇
輪廻說(ニイチエ)……六三九
理と情……六六二

ル

ルツフラート……一八〇
ルーテル……一八三
ルーテルの煩悶……一八四
ルーテルの死……一九三

レ

レオニダス……一〇四
レギユラス……一〇七
列子……三三八
列子の死生觀……三三九
列子と關雎……三三九
麗姬の喩(莊子)……三四一
良忍……四九九
靈魂の有無……六五四
靈魂の形質……六五五
靈魂の歸趣……六五六

ロ

羅馬神話……四五
ロキ……五一
ロイキッポス……六〇
羅馬武士の死生觀……一〇一
羅馬の迫害……一二五
羅馬カトリック教……一二八
ロルラードの徒……一七四
ロック……二一〇
六派哲學（印度）……二八〇
六道輪廻說……二九八
六道……三〇〇
老子……三三六
老子の大道……三三六
魯仲連……三五一

ワ

ワシントン……二〇八
婆羅門豆（ヴァスバンド）……三一〇
「若菜」の死靈……四九一
ワイズマン……六三一

大死生觀索引 終

明治四十一年十二月十七日印刷
同　年十二月二十日發行

（大死生觀奥附）
（定價金貳圓）

著者　加藤咄堂
發行者　山中精二　東京市京橋區築地二丁目廿番地
發行者　柳原喜兵衛　大阪市東區北久太郎町四丁目
印刷者　守岡功　東京市京橋區築地三丁目廿二番地
印刷所　株式會社國光社　東京市京橋區築地三丁目廿二番地
發行發賣所　上宮教會出版部　山中井洌堂　東京市京橋區築地二丁目卅番地
關西發賣所　合資會社積文社　大阪市東區北久太郎町四丁目

不許複製

文學博士 村上專精先生序
加藤咄堂先生著 大內青巒先生跋

○補增 死生觀 全一冊

定價金四十錢 郵稅金八錢

死生は人生の一大事實にして千古未解の問題たり本書は古來哲人の精到なる思索と英雄豪傑が決死の覺悟とに照し學說と事實との兩方面よりこの問題を解決したるものにして議論穩健文章明晰大に江湖の喝采を博し茲に第十五版を發行するに當り更に死生雜話數十題を加へ其遺を補ひ本問題を論明せんとす乞ふ一本を購ふて此千古未解の問題を決せよ。

文學博士 前田慧雲師序
文學博士 南條文雄師跋
加藤咄堂先生著

○補增 運命觀 全一冊

定價金四拾錢 郵稅金八錢

人は運命の兒なり榮枯盛衰皆其爲めに左右せらるる抑運命とは何ぞや本書は著者が嶄新なる論を以て舊運命觀を擊破し世界各民族の運命に關する風習を擧げ更に深遠なる哲學科學の眞理により新運命觀を建設して個人國家社會の運命を論じ終りに人生の眞趣を解してこれが開拓策を說き此運命と奮鬪して成功の位地に達せるの實例を示す讀め浮世の波に漂へるの士來れ開運の鍵を得んとするの徒本書は成功の秘訣なり開運の守符なり。

加藤咄堂先生著

○增訂 通俗講話 佛教要義 全一冊

◎總クロース美本◎紙數五百頁餘 正價金一圓五拾錢 郵稅金拾貳錢

本書は著者が多年の研究を傾け盡くして、浩瀚なる佛敎の要を摘み萃を拔きて秩序嚴然たる一大組織とし、高遠なる敎理を示すに平易明快の筆を以てし、何人にも知り易く解し易く談話體に說述し先づ佛敎以前の印度哲學より釋迦牟尼の傳記に入り、大小乘の區別並に其發達變遷を說き、敎理を示しては佛敎の宇宙觀に筆を起し、宇宙は如何にして成立せしや又宇宙は如何なるものなるや、其現象は如何、其本體は如何と窮盡し、人生問題に於ては生死の根原、生前死後の狀態、靈魂の有無、輪廻轉生等を明し、其の道德を說いては性の善惡並びに善惡の標準を論じ十善十惡、苦樂因果の原理を示し更に煩惱の源底を盡くして、世出世の道德、戒律を精敍して地獄極樂の說に及び身心の關係より識心の狀態に入り、唯心所現の順序を示し、深く三界唯一心の妙理に入り微を究め玄を闡き靈妙なる宇宙と靈妙なる心識との感應を述べて筆舌及ばざる佛敎の妙境を親はしめ、苦を離れて樂を得、迷を轉じて悟を開く佛敎の要義は網羅して洩すことなく更らに佛敎發達の歷史を說くに至りては各宗派の特色を示し敎理を擧げ、終りに其一貫の理を論じた る空前の好著なり 請ふ一本を購ふて佛敎の妙趣を味はれむことを。

文學博士 井上圓了師序
加藤咄堂先生著 島地默雷師跋

○女性觀 全一冊

定價金卅五錢 郵稅金六錢

美神の權化として崇拜すべきか惡魔の化身として厭忌すべきか本書は流麗の文と獨得の觀察とを以て女性觀の變遷歷史上の活動を叙し賣買掠奪等の奇習異俗より名媛才女が佳話並に闇黑面の女性に及び婚姻獨居職業等の問題を究めて社會上の地位を明にし更に戀愛嫉妬等の心理的現象を示し筆を女性の敎育婦德の養成に擱く神か魔か請ふ一讀を吝む勿れ。

加藤咄堂先生著

○心的生活 英雄史 全一冊

定價金五十錢 郵稅金八錢

本書は古今の英雄を拉し來りて時代の推移と思想の變遷とを觀察し、波瀾あり抑揚ある彼が行動の裏面には煩悶あり慰安ある心的生活の存するを說破したるものにして、其名は英雄傳たりといへども、實は是れ武士道發達史たり。思想變遷史たり。英雄傳たり。隱逸傳たり。趣味に富むことは小說に優り敎訓を含むことは倫理書に過ぎたり。

加藤咄堂先生著

○修道講話 全一冊

定價金四十錢 郵稅金六錢

道を行ふは人生の本務にして道を修むるは品性の向上なり本書收むる所、曰く求道の情神、曰く安心の關鍵、曰く修養の道程、曰く宇宙と人生、曰く生活の趣味、皆なこれ人生の本務を說き品性の修養を語るもの、更らに道とは何ぞ、人心の秘奧、煩惱と社會の各節あり終りに修道漫錄を付して逸話格言等日常修養に資すべき材料を載す、文章平易にして趣味深し眞にこれ修道の好指針たり。

加藤咄堂、境野黃洋兩先生
文學士 薗田宗惠師共著

○佛敎講話 全一冊

定價金四十錢 郵稅金六錢

本書加藤氏の組織的佛敎、境野氏の歷史的佛敎、薗田師の實踐的佛敎の三講話より成り三方面より三氏が佛敎を觀察し何人にも解し易く講述せられたるものにして敎理、歷史、道德等擧げて盡さゞるなき好著なり。

加藤咄堂先生著

○小說 靈光 全一冊

定價金五十錢 郵稅金五錢

先生著書既に等身、しかも未だ筆を小說に染めず頃者感する所あつて此の一篇を作り現代社會の實生活を描寫して人心の機微に觸れ黑闇々中に不斷の靈光を認めしむ眞にこれ明治文壇の一異彩。

加藤咄堂先生著

○演說文章 應用修辭學 全一冊

定價金七十五錢　郵稅金八錢

文名嘖々江湖に知られたる加藤咄堂先生は又我が國屈指の雄辯家なり、本書は先生が多年の經驗と修辭の原則により、演說幷に作文に關する原理を說述して其應用を示し、言語の組立、音聲の抑揚、文章の組織、推敲の工夫に至るまで叮嚀反覆に之れを說明し、古今東西の文話幷に演說家の經驗談を加へ、實益に兼ぬるに趣味を以てしたる近來稀に見るの好修辭學たり。

理學士　石川成章先生著

○宇宙の默示 全一冊

定價金七十錢　郵稅金八錢

石川先生は我が國有數の科學者たると共に又熱烈なる宗教信者たり、宗教眼を以て自然を觀察し、科學眼を以て、宗教を評論す、天に閃く星辰も、地を彩る山川も皆な之れ自然の妙音たり、宇宙の默示たるなからむや、先生流麗の筆を以て之れを寫し、時に人生の情熱を論じ、自然の光線を說明し、時に水火の作用を說かて人心の煩悶を寫し、時に自然を示し時に地球の主命を論ずる所何人か美妙に渴仰し、其秘密に隨喜せざらむ、苟くも宇宙人生に疑を抱くの徒、希くは本書の妙音によつて大悟する所あれ。

理學士　石川成章先生著

○自然の妙趣 全一冊

定價金四十錢　郵稅金六錢

『春有百花秋有月、夏有冷風冬有雪』自然の妙趣は吾人を教訓し吾人を啓發す、本書は著者が該博なる科學的智識を以て熱烈なる宗教的信仰を皷吹せられたるものにして天地の妙致宇宙の興趣收めて一卷にあり。

理學士　石川成章先生著

○自然科學と佛教 全一冊

定價金十五錢　郵稅金四錢

科學宗教共に是れ人生の管鑰心界光明其間奚ぞ微妙の關聯なからんや著者獨特の灑筆を呵し多年の蘊蓄を叙述せられたるものなり諸士夫れ此妙旨味ふるに後るゝ勿れ。

新佛教徒同志會編

◎來世之有無 全一冊

定價金二十錢　郵稅金四錢

現代の名士一百餘家が來世の有無につきて回答せられたる者にして實に空前の珍品たり。加藤弘之、佐治實然、志賀重昂、井上哲二郎、木下尚江、幸田露伴、前田慧雲、渡邊國武、建部遯吾、井上圓了、島田三郎、南條文雄、村上專精、谷本富、三島中洲、三輪田眞佐子、湯本武比古、戸水寛人、三海老名彈正、平井金三、中島力造の諸君外九十餘大家。

醇庵　鈴木券太郎先生著

○犯罪論及女性犯人

菊判全一冊クロース美本定價金一圓五十錢　紙數五百五十ページ餘　郵稅金八錢

犯罪とは何物か犯人とは何者か女性とは何者か女性犯人とは何物か本書は此等問題に答へんが爲めに犯罪生理學、犯罪心理學、犯罪社會學の見地に據り罪罰の根本哲學を開立し世の法曹家の犯罪及犯人定義に一大動搖を與へ女性犯人に就ては其解剖的及生理的特狀を詳說し其人相、毛髮、乳房、生殖器、音聲、筆跡、感覺、色慾、文身の如き亦之を遺傳の法に商量し或は模型の理に依證し先天犯者熱情犯者其他の分類下に於ては各其特質を列擧し我國最近の犯罪事件を具體的に參考し以て理實配合の巧を究て造化の微を開き人情の細に入り女性の秘密を暴露し其罪惡を檢案する處觀察犀利思索超凡洵に之れ科學の精華文學の上乘たり而して考證は則廣く百家に出入し論斷は則浮誇を避け一言一句悉く根底あり、犯罪學の一大體統、新刑法學派の一大柱礎、理論深遠風神崇高の一大文章此書を指して現世紀の一大產物、思想界の一大革命と云はずんば將た何物をか指さん實に破天荒の奇書也。

前東京高等師範學校教授小山左文二先生著

○日本文法の解說及び練習

全一冊　三百八十頁餘　定價金六十錢　郵稅金八錢

大學豫科、男女兩高等師範學校、各種高等專門學校入學受驗者、並に文部省教員檢定受驗者參考書として、中學校、師範學校、高等女學校の學生及び小學校教員檢定受驗者の參考書として、著者苦心の作に係る、解說周到にして明快、載するところの練習問題實に一千五百餘、添ふるに明治三十年以降本年まで八年間に於ける各種高等學校入學試驗文法及び明治十八年以降本年まで二十年間に於ける文部省教員檢定試驗文法問題の全部を以てし、一々適切にこれを解說指導せり。

文學博士　三宅雄二郎先生著

○小泡十種 全一冊

定價金四十五錢　郵稅金六錢

流れては浩渺盡きざる大河となり、散じては綾紛限りなき飛沫となる、小泡か激湍か蓋し近代稀有の快著なり。

久米邦武先生著

○上宮太子實錄

全一冊　洋裝美本

定價金七十五錢　郵稅金八錢

本書は高眼達識を以て史界獨歩の稱ある前大學教授久米邦武先生が該博なる考證と奇拔なる見解とを以て、日本文明の開拓者たる聖德太子の實傳を詳叙し、荒唐不稽なる從來の傳說を擊破し、前人未發新見地を以て其眞面目を發揮し、太子を中心として政治、宗教、文學、美術の各方面に亘りて日本文明の淵源を尋ね其特色を說きて剩す所なく。論は東西に及び、議は今古を悉くす、眞にこれ多く得べからざるの珍書たり。興國の氣運今や熟して人は皆な我が文明の眞相を知らしむことを思ふ本書の出る豈に偶然ならむや。

文學博士　松本文三郎先生著

○宗教と哲學

全一冊

定價金四十五錢　郵稅金八錢

本書全篇十有餘章まづ筆を宗教と哲學との根本問題に起し宗教道德研究と信仰等次第を逐うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據にある事を闡明す蓋し病弱なる現代思想界は此等に因りて始めて元氣の回復を求め得るなり。

新公論社編　○附錄學生消夏法

○男女學生氣質

全一冊

定價金廿錢　郵稅金二錢

該書は坪內雄藏、柳橋絢子、幸田露伴、村上專精、三輪田眞佐子、佐治實然、山脇ふさ子、奧村五百子、鳩山春子、本田庸一、南條文雄、小杉天外、山縣悌三郎、前田慧雲、井上圓了、村介石、磯邊彌一郎、戸川殘花、鈴木券太郎、黑忠惠、遲塚麗水、中川謙次郎、南岩倉具威、石橋一郎、古川流泉、寺田勇吉、ノオスター、坂本盛德、加納久宜、下田次郎、田中治六、加藤咄堂、境野黃洋、中島德藏、その大家が、現代男女學生の長所を助け、その短所を補ふべき方法を示されたるものなり。

獨逸哲學博士　ポール、ケーラス先生著
鈴木大拙居士譯

○阿彌陀佛

全一冊

定價金卅五錢　郵稅金四錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛教の根本問題也ケーラス博士その彩筆を揮ひ殆ど小說的結構を以て通俗にこれが解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評喧々たることや弊堂頃者十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる大拙居士を煩はして此和譯を得たり豈啻佛の有無に惑ひ心の不安に悶ふる人のみこれを讀むべしと言はむや。

井洌堂發賣書目

文學博士　南條文雄師著

○感想錄

全一冊　定價金四十錢　郵稅金六錢

本書は博士平生の感想になるものにして或は古人の訓誡を示して後進を誘掖し或は博士自身の感話あり偉人才媛の逸話あり時に俚諺に因て教を垂れ時に武道を語り時に信仰を談じ加ふるに修養十則を以てす實に之を精神修養の好指針品性淘冶の良資料たり。

文學博士　南條文雄師著

○忘己錄

全一冊　定價金四拾錢　郵稅金六錢

佛教の信仰は己れを忘れ佛陀の大慈悲に歸命するにあり本書は博士多年の靈的實驗に徵し他力宗教の眞髓を說述したる者なり行文平易にして所說懇篤面たり博士の馨咳に接する思ひあり一讀よく煩悶憂鬱を慰む。

文學博士　南條文雄師著

○人道

全一冊　定價金十五錢　郵稅金四錢

人の道とは如何なるものぞ本書は博士が儒教の骨髓たる仁義五常の道より宗教の極致たる經典の所說とを對照し叮嚀懇切に人道の大旨を示されたるものにして博引旁證加ふるに適切の譬喩を以てしたれば談話體に何人にも解し易く說かれたるもの布教師の參考たり修養の資たる傳道の好施本なり

アーサー、ローイド先生序
曹洞宗大學講師　忽滑谷快天師著

○怪傑マホメット

全一冊　挿畫

定價金五十錢　郵稅金八錢

序論にはアラビヤの奇風異俗抱腹絕倒すべき者詩趣津々たる者枚擧に遑あらず本論には宗教家として、マホメットが迫害凌辱の中に隱忍默耐する預言者的高風を叙し更に將軍として渠が千里の馬に跨り屍山血海を蹈破する雄姿を描き進んで渠が政治家としての怪腕鬼術を述べ最後に渠が個人として起居動靜の瑣より閨門の秘事に至る迄悉く詳記して裸々赤條々たる眞面目を現はす我國空前の大著なり。

曹洞宗管長　森田悟由禪師序
加藤咄堂、峰玄光兩先生共著

○禪觀錄

全一冊　定價金三十錢　郵稅金四錢

禪とは何ぞや曰く言ひ難し本書は言ひ難きの禪を說き盡し餘蘊なく更に發して武士道の根底となり凝つて文學技藝の精華となれる事蹟を描寫し逸話あり漫筆あり神韻縹緲一讀卷を捲く能はざらしむ

文學博士　前田慧雲師著

○修養と研究　全一冊

定價金五十錢　郵稅金八錢

博覽高識敎鞭を帝國大學に執りて幽を闡き微を穿ち温厚篤實感化を東都の青年に垂れて一世の模範となれるは前田先生なり本書は先生が多年の研鑽になれる佛敎敎理上の大論文と修養に關する深厚なる談話とを集輯したるものなれば一度本書を繙かんか親しく先生に接して指導を受くるの感あるべし。

文學博士　前田慧雲師著

○禪榻茶話　全一冊

定價金五十錢　郵稅金六錢

短篇長語五十餘篇修養の要諦を說き信仰の妙味を談じ學藝の精髓を提げ古今の人物を評し箇々の話頭深厚の敎訓と無限の興趣を感せしむ。

文學博士　前田慧雲師著

○蓮如上人　全一冊

定價金卅八錢　郵稅金六錢

佛敎界に、最も多くの特色異彩を放ちつゝある、純他力敎異宗の大成者なる蓮如上人に就て、前田博士が、該博の學識と、燃犀の史眼とを以て、上人の時代、性格、敎義、信仰、事業、感化等のあらゆる方面に涉り、微に入り、細を穿ちて、評傳せられたるものにして、上人の眞面目は歷々として讀者の眼前に活躍し、純他力敎の眞髓は、一讀の上にて解せらるべし。

文學博士　南條文雄師著

○修養錄　全一冊

定價金四十錢　郵稅金六錢

温厚篤實、而も道心堅固の聞へある、南條博士の實驗的修養を詳細に記載したる者は本書なり。章を分つこと六、節を分つこと二十、著者得意の趣味ある談柄は細大漏さず擧げて本書の中にあり。人生問題の解決に惱める者、若くは樂しき生活を送らんと欲する者は速に來て本書を讀み給へ。本書は蓋し煩悶者の慰藉劑なり、求道者の好資料なり。

曹洞宗大學講師　忽滑谷快天師著

○禪學講話　全一冊

定價金四十錢　郵稅金六錢

適切簡明以て精神の修養に資する者は禪也。古往今來、偉人哲士の眞骨頭を鍛練したるものは禪也。痛言快語以て人生の眞意義を示し、處世の妙諦を說く者は禪也。本書『人生の謎』以下各章、明快の說、有趣の筆、禪の眞髓を發揮して餘蘊なし。

曹洞宗大學講師　忽滑谷快天師著

○禪の妙味　全一冊

定價金四十錢　郵稅金六錢

上篇は精神澄靜の妙味を論じ苦學昇沈の中に處する實學の工夫を示し百年の煩悶を一掃すべく下篇は觀音の妙味を說き唯心觀より萬有一體觀死生透脫觀に及び千古の惑を破るべく眞に禪學者の良師たり。

曹洞宗大學講師　忽滑谷快天師著

○批判解說禪學新論　全一冊

定價金五十錢　郵稅金八錢

本書に收むる所唯心論現象即實在論物心合一論萬有一體論安心立命論の五章は禪學の根底を論明して餘蘊なく以て禪學史上一新時期を劃するに足る最後に禪語略解を附し初學の參禪に便にす。

建仁寺管長　武田默雷禪師著

○默雷禪話　全一冊

定價金五十錢　郵稅金六錢

切實なる活說法あり時に無邪氣なる懷舊談あり一度本書を繙かんか禪師の咳唾彷彿として紙上に活躍せり若し夫れ禪師獨特の三十棒に至りては僞善と輕薄の現代學者を罵倒し盡くして完膚無からしめ覺えず快哉を叫ばしむ。

建仁寺管長　武田默雷禪師著

○續默雷禪話　全一冊

定價金四十五錢　郵稅金六錢

本書は臨濟の師家武田默雷師の談話百則を收む皆是れ平話俗談些の禪臭なき所却て棒喝あり敎訓あり修養あり讀むもの此の間に自ら禪機を拈じ來らん。

原坦山禪師著　荒木磯天講述

○禪學心性實驗錄　全一冊

定價金四十錢　郵稅金六錢

本錄は禪門の奇傑故坦山老師が三十有餘年の實驗に基き迷悟の本體を腦脊の二髓に歸し惑病の同體を論じ腦脊の異性を道破したる者にて禪學及び生理學心理學上大革命を惹起すべき新學說なり老師が一代の功過は係りて此一書にあり。

黒岩周六先生　講演　丙午出版社編

○人生問題　全一冊　定價金五十五錢　郵税金八錢

人生とは何ぞや、是れ千古の疑問なり、哲人之を說き、碩學之を論じて、而して懷疑の雲益密に、苦悶の人愈々多からむとす、然るに現代思想界の泰斗、黒岩先生、自ら人生問題に逢着して、疑問の源泉を探り、大に其眞趣を得て、玆に此書あり、叙る所、神の有無に始まり、人生の悲觀樂觀に終る、眞に天籟の妙音なり、世の悶ある人、疑ある人、速に來つて此福音に接せよ、庶幾くは平穩と滿足と活力とを得て、温くH光ある人生に觸着することを得ん。

加藤咄堂先生著

○通俗心經講話　全一冊　定價金卅錢　郵税金四錢

佛敎八萬四千の法門を收めて二百六十二字に單み、宇宙の神秘天地の妙用說て到らざるなく、人心の、源底信仰の要義示して盡さざるなし、著者平易の文を以て之を講述す、眞にこれ修養の好資學佛の南針たり。

曹洞宗大學講師　忽滑谷快天師著

○練心修道參禪道話　全一冊　定價金四十錢　郵税金六錢

本書は禪理を經とし道義を緯とし古今の說話を交錯したる禪學道話にして或は滑稽飄逸抱腹絶倒すべき者或は悲痛哀怨萬斛の涙を流すべき者或は勇壯快活肉動き骨鳴るの慨ある者或は謹嚴方正古聖先賢と伍を同うして立つの感ある者あり言語談笑の間自然に道に入らしむ禪學書中破多荒の大文字也。

大內青巒居士著

○佛敎の根本思想　全一冊　定價金五十錢　郵税金六錢

浩瀚なる佛敎の根本思想を捕へ來りて縱横に解釋し雄辯滔々言辭平明宇宙人生に關する諸種の疑問を解釋して快刀亂麻を斷つの感あり紊茫たる佛海此好指針を得て初めて渡るを得むか。

文學博士　村上專精先生著

○自信錄　全一冊　定價金五十錢　郵税金六錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり言々己の實驗を語り句々心の奥底を披瀝すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節說いて至らざるなく述べて盡さざるなし進歩せる佛敎學者の見解は此書によつて窺ふべく敬虔なる佛敎信者の態度は此書によつて知るを得べし。

東洋大學講師　釋清潭先生著

○寒山詩新釋　全一冊　定價金五十錢　郵税金八錢

是れ佛か是れ仙か是狂漢か得て解すべからざるものは寒山詩なり是れ韻語か是れ詩語か此れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として拔けざることや著者清深雄大の學と才とを以て一筆勾斷彼が面目こゝに於てか露白す寒山詩禪を知らむと欲するものは須らく此書を以て指南車と爲すべし。

ベークマン先生原著
杉村縱橫先生補譯

○改訂增補肺病術　全一冊　定價金四十錢　郵税金四錢

肺病を恐るゝものは讀め、肺病に罹れるものは讀め、歐米に於ける最新式の民力養成法を讀め、此書に六の特色あり。

第一、時間を要せざること。
第二、費用を要せざること。
第三、場所を要せざること。
第四、勞力を要せざること。
第五、言文一致なること。
第六、總より假名付なること。

故に男子は勿論、婦人小兒と雖も、容易に理解し容易に實行し而して確實に其功を收め得べし。

清水故默爾先生遺稿

○紫風全集　全一冊　定價金貳圓　郵税金十二錢

清水君は敎界の元勳爲地默雷師の第二子にして其篤學能文既に世に定評あり往年大志を懷きて印度に留學し佛敎淵奥の研究に從ひ又大谷光瑞師が佛蹟大探險の壯擧に加はりて功蹟頗る大なる者ありしが不幸にして未だ大に所得を世に施くに至らずして異境に病歿す知友之れを哀しみ其生前述作せるところを集めて玆に之れを公にす論文あり俳句あり漫錄あり書簡あり悉くこれ金玉の名文君が天才的詞藻の燦として輝けるを認め得べし

知人冠　杉村廣太郎先生著

○七花八裂　全一冊

定價金六十錢　郵稅金六錢

著者曰此書は著者が名に畏れず戀に泣かず半錢の債を負はず半個の寵に庇はれず天上天下一點半書も他の製肘威壓を受くることなくして縱に我が見得底を披瀝せる者過去十三年間の惡文惡詩收めて此の一卷の中に在り著者の如く貧乏し著者の如く墮落せんとする者は請ふ此書を讀め。

文學博士　村上專精先生著

○誠のしるべ　全一冊

定價金四十錢　郵稅金六錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治もこれに於てすべく實業もこれに於てすべく宗教も道德も教育もまたこの根底の上に立たざるべからざるなり今や村上博士古今東西の事例を引いてその然る所以を詳說せらる苟も誠を體得して眞の人たらむと欲するものは此書を讀め。

建仁寺管長　竹田默雷禪師著

○禪機　全一冊

定價金四十錢　郵稅金四錢

活殺自在は禪の機鋒にして、與奪縱橫は老師が手腕なり、兵家之れを用ひて其妙を盡し、商家之を用ひて其玄を究む、日常行中此禪機あつて初めて活社會に活運動を試みるべし、本書は諸方面に涉りて應用せらるべき禪機を示したるものにして何人を問はず一讀二讀三讀すべき近來の活書なり。

文學博士　南條文雄師著

○靜思錄　全一冊

定價金四十錢　郵稅金六錢

靜かに思へば心理の奥底には信仰の念の迸り出るを禁ずる能はず、本書は博士が信仰の餘瀝にして說話あり研究あり諄々說て倦まず人をして敬虔の念を起さしむ修養の箴たり處世の訓たること此書の如きは尠なし請ふ一本を購ふて其眞趣を味へ。

文學博士　法學博士　男爵　加藤弘之先生著

◎迷想的宇宙觀

定價金七十五錢　郵稅金八錢

アーナー、プライト氏原著　東洋大學講師　中島徹藏先生述

◎解說批評　倫理學原論

定價金五十五錢　郵稅金八錢

東京帝國大學講師　文學士　常盤大定先生著

◎釋迦牟尼傳

定價金七十錢　郵稅金八錢

スタンフォルド大學總長ジョルダン博士原著　マスター、ガプアーツ中村平先生譯

◎人物の修養

定價金五十五錢　郵稅金八錢

曹洞宗大學講師　忽滑谷快天先生著

◎達磨と陽明

定價金七十五錢　郵稅金八錢

アー、エフ、ステンツラー氏原著　ドクトル、ブイ、エル、ビッシエル氏　增訂　ロツフイ　荻原雲來氏譯補

◎梵語入門

定價金一圓　郵稅金八錢

慈雲尊者眞筆　高槻順次郎氏序　阿滿得濟先生著

◎悉曇阿彌陀經

定價金一圓　郵稅金八錢

東洋大學講師　增田補　境野黃洋先生著

◎聖德太子傳

定價金五十五錢　郵稅金八錢

マクス、ミニラー博士原著　佛教大學講師　文學士　清水友次郎先生著

◎宗教學綱要

定價金五十五錢　郵稅金八錢

●大內青巒居士著

碧巖集講話

洋裝二冊定價四圓　和裝四冊四圓五拾錢　送料各廿錢

●各宗大家分擔執筆　來馬琢道師編

通俗佛教各宗綱要

定價金壹圓五拾錢　送料金拾貳錢

●境野黃洋先生著

日本佛教史要

定價金壹圓　送料金拾錢

●境野黃洋先生著

印度支那佛教史要

定價金壹圓　送料金拾貳錢

●加藤咄堂先生著

大乘起信論講話

近刊

●來馬琢道師編著

叢林必携　禪門寶鑑

近刊

●大內青巒居士著

大乘心地觀經　報恩品講義

定價金七十錢　送料金八錢

發行所　東京芝區露月町　振替口座二九七　鴻盟社

井洌堂發行書目

東洋大學講師文學士
元第五高等學校教頭　渡邊又次郎先生著

○最新論理學

全一冊　紙數三百五十餘頁　クロス綴
定價金一圓二十錢
郵稅金八錢

本書は東洋大學中央大學第二高等學校第五高等學校等に於て十數年に涉りて論理學を擔當せられ本邦に於ける斯學泰斗として知られたる渡邊文學士の新著にして斯學の重要なる事項は擧けて之を網羅し所論の明晰にして內容の整頓せること從來絕えて其比を見ざるのみならず他書の缺陷たる諸點に就きては特に十分なる研究を施したると同時に能ふべき限り簡潔にして而も平易なる叙述により て斯學の大綱を示さんことを努め其間に於て到る處に學士の卓見を伺ふことを得しめたるもの是れ實に本書の特色なり又欄外に重要なる題目を揭げ卷末に英語を對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし苟も學術を以て身を立てんとする者は是非共一本を座右に備ふるの必要あり。

●●新刊豫告●●

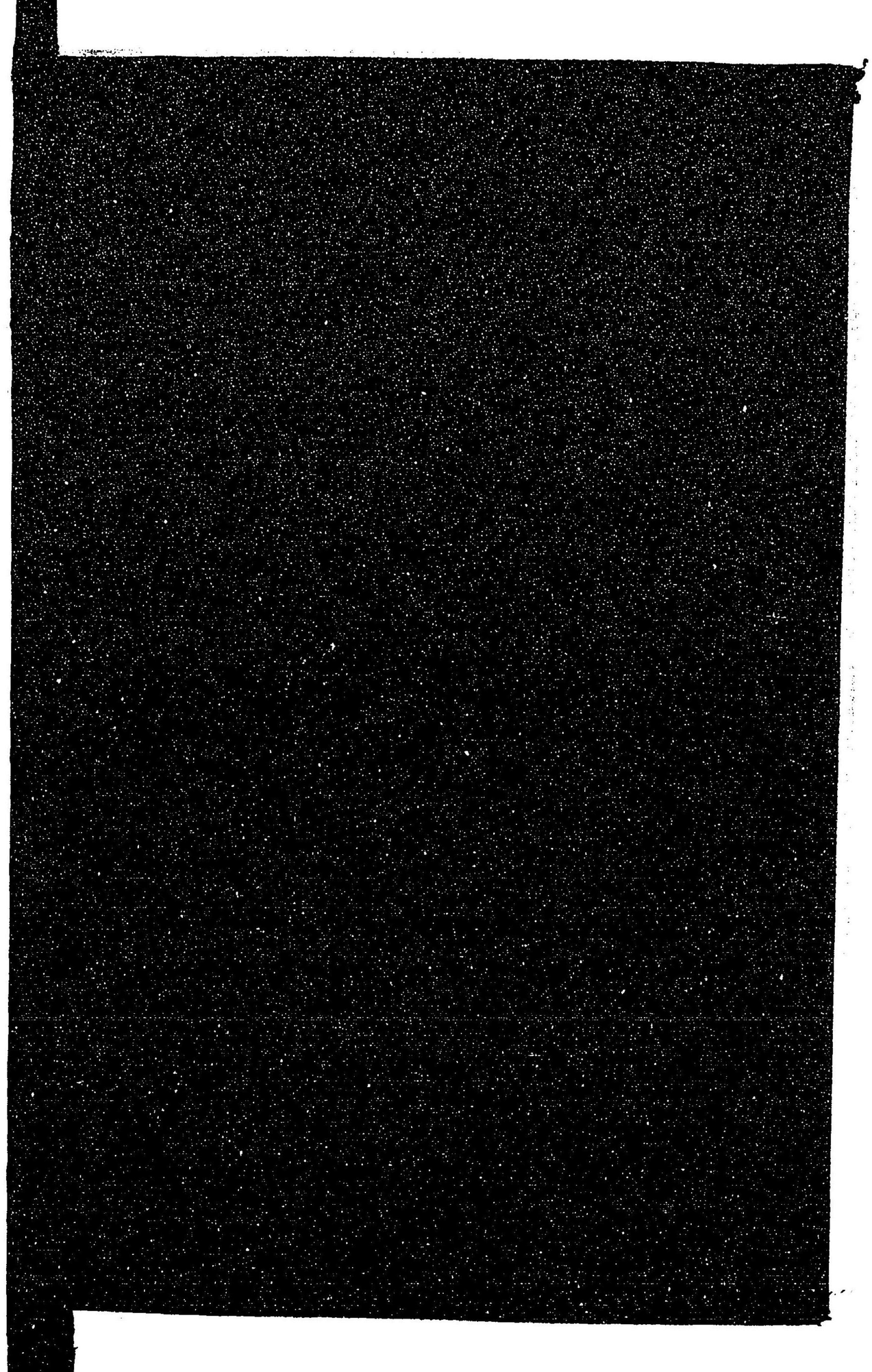
大內青巒居士
●道德之根底　全一冊

曹洞宗大學講師　忽滑谷快天先生著
●參禪逸話集　全一冊

加藤咄堂先生著
●增訂佛教要義　全一冊

加藤咄堂先生著
●增補運命觀　全一冊

524
109



324
109

013709-000-7

324-109

大死生観

加藤　咄堂／著

M41

ABA-0181